



再撰

花洛名勝圖會

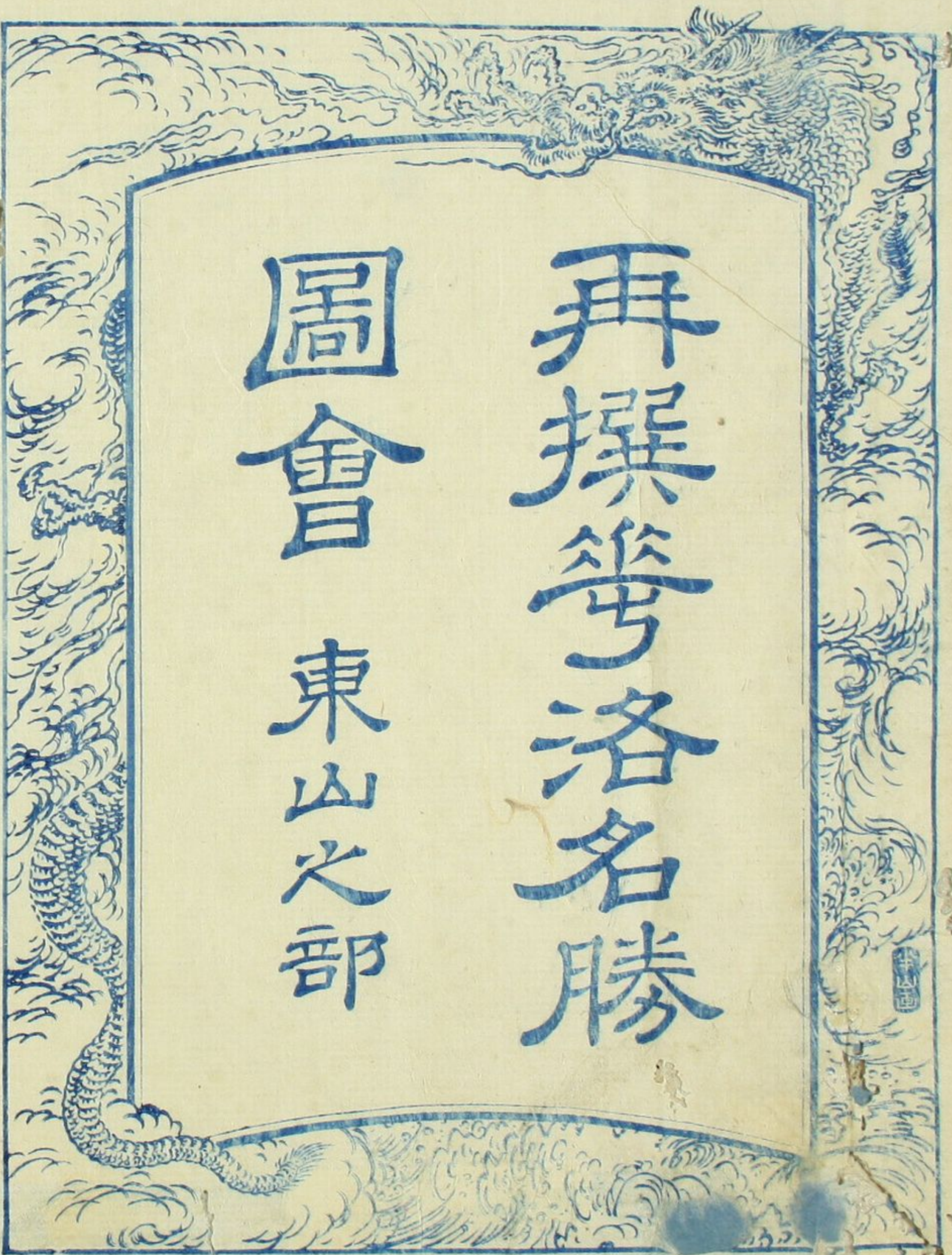
東山之部

一



再撰等洛名勝

圖會 東山之部



九龍文庫

圖會

花洛名勝圖繪新刻本
甚多為板經手漫漶且名區
勝境不無增損隆禋是心迹
索考搜西屏詳卷更上本心公
于世強徒却及四卷之人是

跡未嘗一至名如日境之播也
 願溫友步新之知之得之矣
 較之他州國終不可同日而論
 豈了不將安順之集裁多
 知購來此國終未嘗
 集波馳流海紙價為

東山序人章

之貴也伴志誘斯一言因
 為書之者文久二年去
 忘朝日

凌陰山翁



伏原正二位宣明卿序

豈因元凱浮梁日肯比白公治水年祇是
春風楊柳外鴨河綠漲玉虹垂此余丁巳
早春絕句也前年春 命清治富河尋
營四條新橋所以有此作焉戊午夏日津
久井翁以所撰東山名勝圖誌見示首載
四條橋之書法訪于老拙因略錄一揮

北の山とてさきこふがら。年々とて
ふちり。

長門の殿人新原若樹

例言

此編ハ洛東山川の壯麗を圖つつて雲上公子の座遊ふ小筆
傍ら遠郷の風流韻士我都を慕う々々未見者此圖を慰めむむが
為小作まるる故小画を専らます其文の如き概畧を述しす
も一考證詳悉を極まむと欲せば雍州府志都藝祿布山州
名跡志山城名跡巡行志山城名勝志等先哲の成書し成就し
辨ますを詩歌俳句の類し曾し余が記憶しる所又友人諸
寄贈し随し餘白し填むむるし過しり覽者其拙撰しを
事しなり
前板都名所圖會同拾遺の二書ハ安永年間秋里湘夕の
撰し係る當初世し行むを依り事昌人したること聞き然しも今を
去ること凡そ八十し年し久しきし経しましに堂塔祠宇あるしに
回祿し羅し又ハ頽し廢し屬しせるし少しなるし中しに造立新成し

昔日の觀を改むるも間あるは近歲諸州の名所圖會
見於小美茂競々開板一善を盡く續刻にさるる
其本原たる都名所の沿革異同ありのたゞ圖作の
粗漏之を他邦比さるる耻る事多し余是を慨歎するに
餘り技訂新刺せんを謀むる老の頻りに進み筆力の
及ぶるに奈何せむ固く先東山北都五卷を再撰し
微志を述はれむ

編首小四條橋を置たる故東山の中央あり河東第一に
繁華を接する通衢ありなり今筆茂爰に起し左右に
區別を設け南に稻荷三ヶ峯北に鹿ヶ谷如意嶽を限とし
凡そ東山の封境を是他日次編の撰便ありんが爲あり
繪圖に其地を画者を拉し真茂画といふも斜直横肆位置
立派の遠近を随々違ふ處無きと心得ゆ中にも小澤華岳

井上左水等既下世々々の遺稿存るものは是を繕寫
し加入し其餘半山東居等今画く所は印章を註し
たゞを監し誰氏の筆ありや否を察し金一

方廣寺大佛殿の圖ハ前板竹原春朝齋が画く所ハ原き
祇園二軒茶屋及び雙林寺大雅堂の来由等ハ湘夕が文
儘を採用し是二士が功を奪ふめありばその苦心の湮滅せ
ざるん事を欲しかり

此書東山名勝を以題号としるものハ近日書肆都名所全編と
改刺せん結構ありと聞くゆゑ其混同を恐るるに殆く稱
異ふもののみ幸ひ其擧に當らば此編をも東山の一隅を
補む事ハ庶幾に

東山名勝圖會卷之壹

目錄 四條以北

東山全圖 賴山記 同名義 賀茂川 同水源 四條河原納涼

四條橋 同祇園橋古記録及新造之記 西石垣 大和橋

東石垣 戲場南北兩座 大和大路 繩手元結 名産香煎造花等

仲源寺 兩止地藏 神明社 萬春樓 大石氏之

井筒茶店 香川景樹記文 大和馬場 萬春樓 大石氏之

祇園新地 神樂殿 祇園社 西樓門 村社

神樂殿 觀慶寺 愛深堂 繪馬舎 行文排

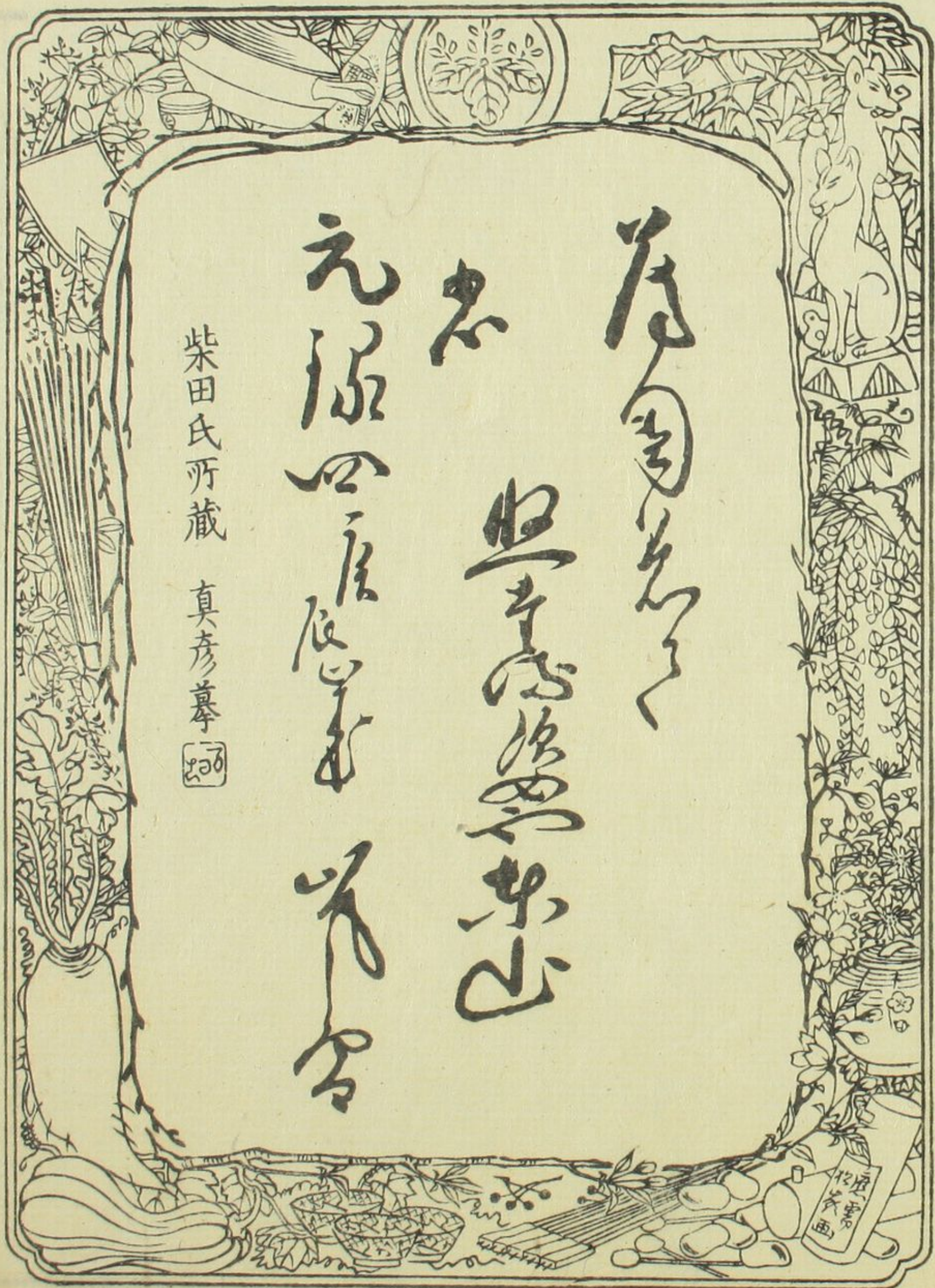
寛和年中祇園社古圖 下河原 祇園北林 同二軒茶屋

祇園梶子 月百舎子 疫伏社 知恩教院 神幸道

山王社 茶堂 紫雲水 佛心院 大方丈 佛間

蓮華樓 鐵盤石 山門 本願寺舊跡 下乗 知恩院宮御殿

書院向 櫻馬場 太子堂舊跡 常在光院古跡 東梅宮 靈空藏堂 青蓮院殿 栗田天王社 三條小鍛冶宗近宅跡 將軍塚 比丘尼坂 安養寺 教向石 觀音堂 行基座禪石 座禪石 小鍛冶井 太子水 凡生石 明智光秀首塚 尊勝院 栗田口 佛光寺廟所 蹴上茶廨 一切經谷 不動堂 外官 大目堂 不動堂 稻荷農祠 三十三觀音小堂 集會堂 鐵盤石 山門 本願寺舊跡 下乗 知恩院宮御殿 花園帝陵 尊光法親王其外諸家塔所 金藏寺 白川橋 栗田燒名産陶器 親鸞之植髮堂 良恩寺 華頂山 首孫刑部俊通墓 蹴上清水 日山神明宮 宇治橋 神坂 東岩藏寺真性院 藤木越



乃國之
 忠
 也
 元祿四年
 柴田氏所藏
 真彦摹

柴田氏所藏 真彦摹

南禪禪寺
 佛殿
 山門
 方丈
 書院
 天授庵
 衆寮
 座禪堂
 景烈祠
 信義堂
 莊聖院
 石大燈臺
 浴室
 白檜木
 中門
 後明
 奉祀池
 總門
 羊角嶺
 駒瀧
 柏傳堂
 藤原堂
 愈好堂
 聖雷橋
 獨秀峯
 孫時尚以下五人
 西福寺
 觀音堂
 上田餘禪墓
 新官氏順心書院
 講堂
 名家扇類
 文庫
 十禪師過
 大將軍杜
 尊良親王墳



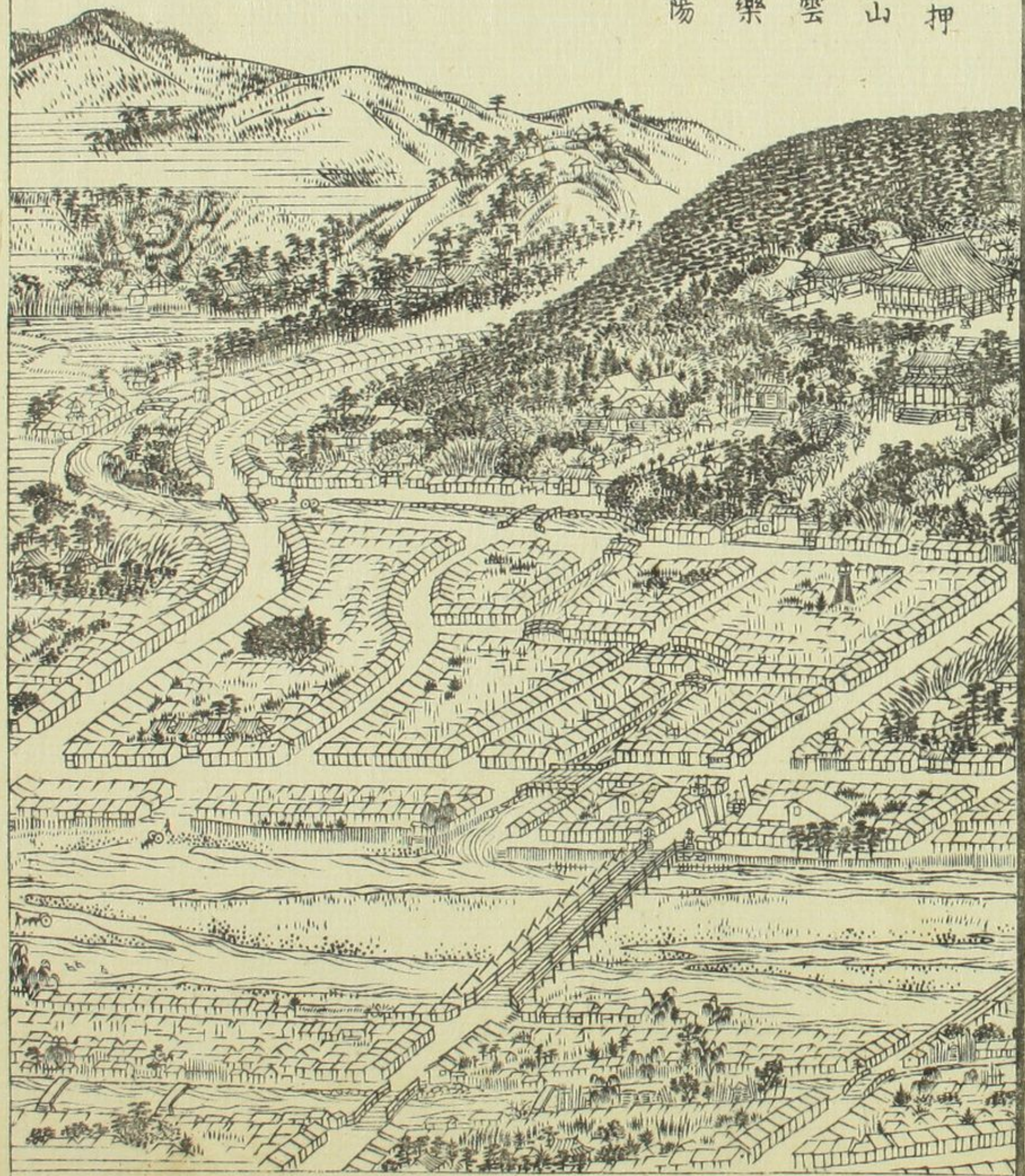
五經之寶

逸品

予為中元書於之梅
梅



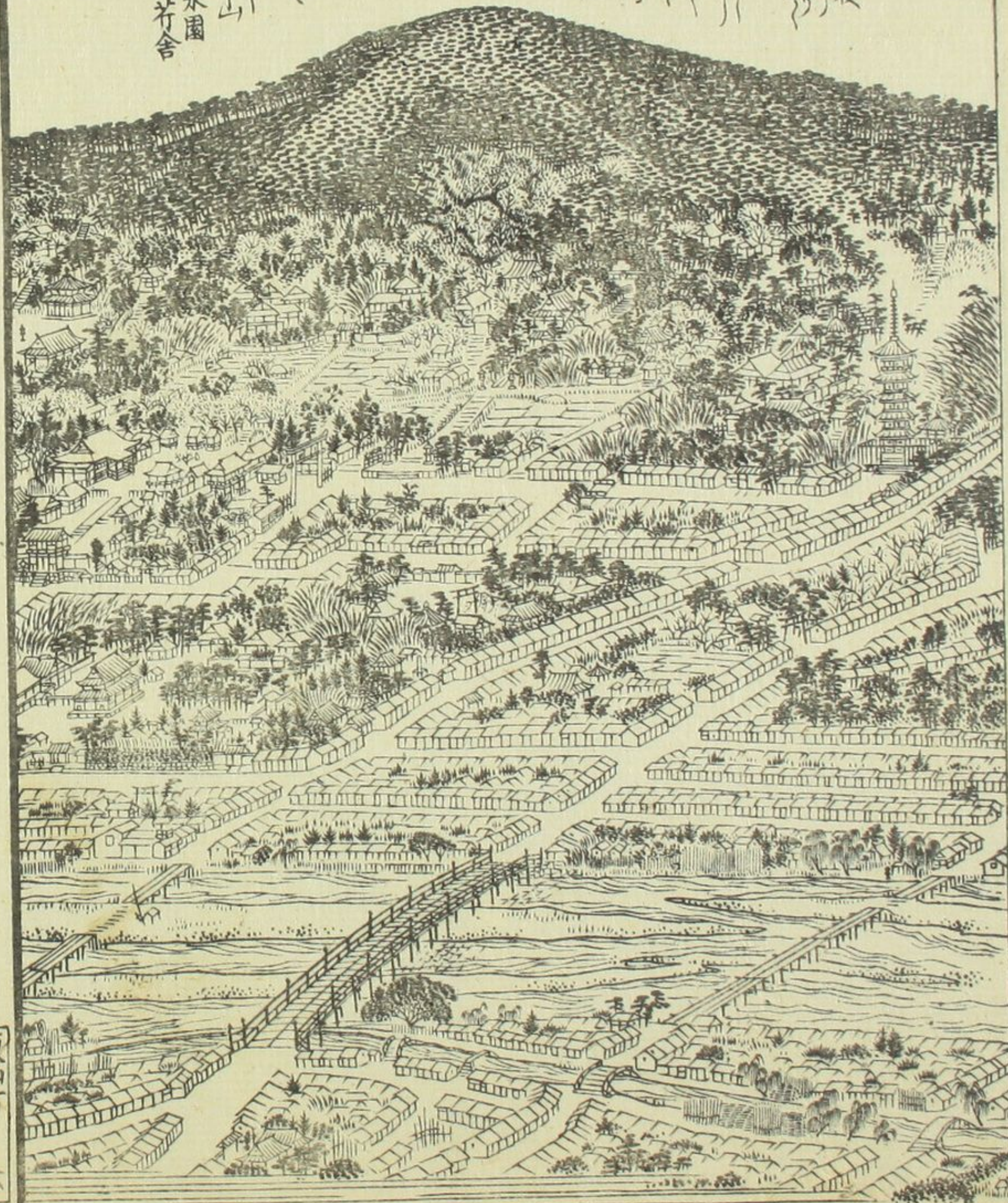
日搖簾押
午風暄
已認東山
花事繁
寺々紅雲
供指點
高為長樂
下知恩
頼山陽



其二

九月十三夜
幸山
山のあり
けふは
今日
ほろひ
八田
知紀

名月や
紅雲
山
洋水園
芥舎



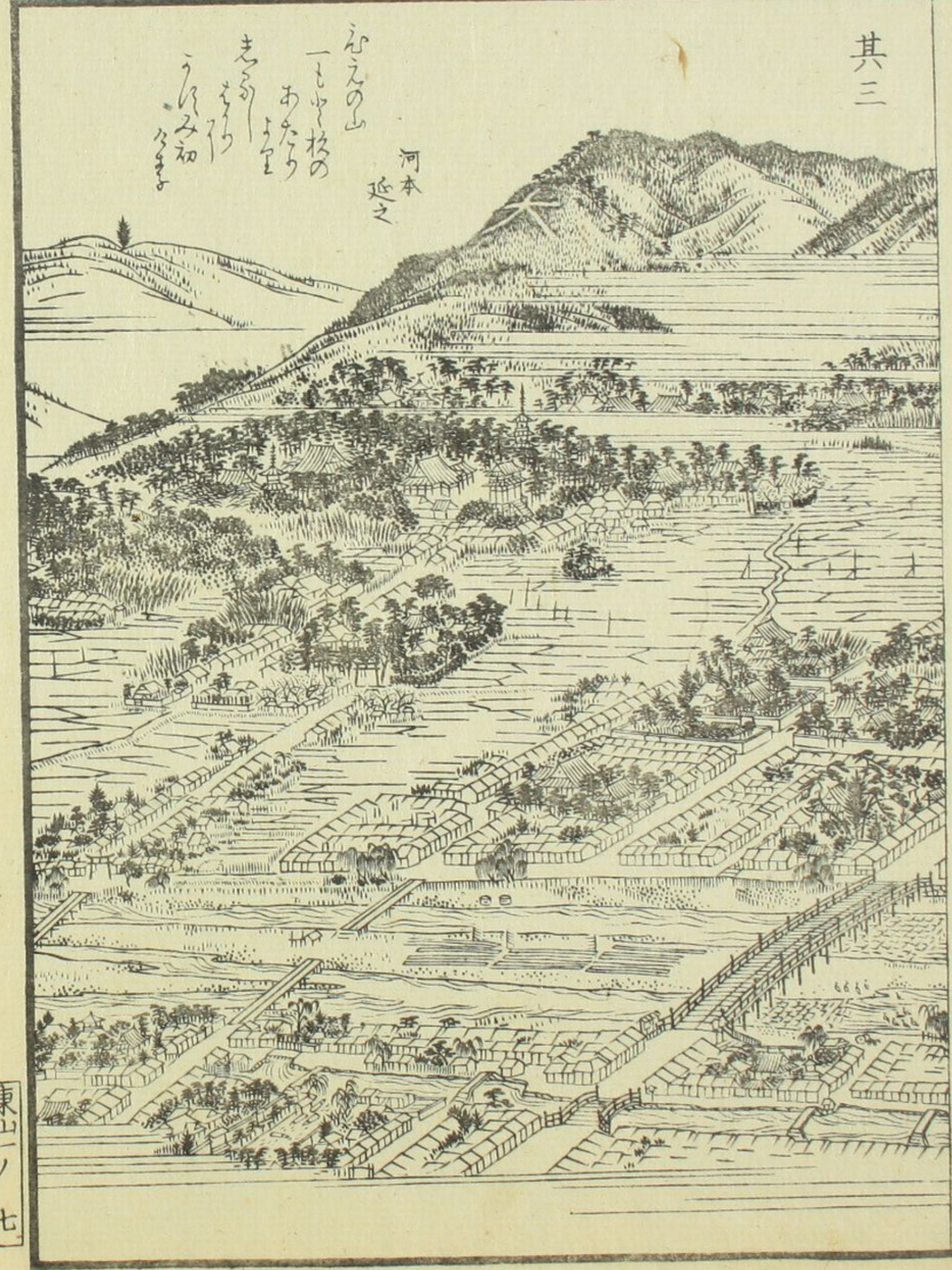
東山ノ六



心え
こゆれ
しほの
まや
ゆき
野村
梅居

黄華溪園
印

其三



心えの山
一もや枝の
あたりに
志の
うけみ初
くま
河本
延之

東山一ノ七

敬福

鴨河圖卷記

鴨河一條溪流劃城與山而下者
而街巷所直有冷熱呼嚕所俯有遠近山
川暎帶之光景隨變成段局在東
也高野合流水為菴尾祠宇廿菴林旗亭
架流沿堤而下時又弓酒家是為第一
局歌樓舞榭依水西轟起竅浮之雲常
在宮櫳前堤迤南小水略約夾之雲紅
殘粉與柳煙出沒是為第二局略約之

西開而分水賣魚之店與賣薪之家
水相對忽忽電陰鯉臨階澆杯而賣薪
之背名家起樓以而大川斜睨大橋輪
蹄絡繹而華頂山翠霞歷其樓
臺冬多是為第三局以下人烟甚密
夏月自樓上望之每日入萬點燈焰
軟塵爭氣然而視之涼棚菴磧區分水
石叙香鬢影繽紛於月色燈光之間蓋水
東紅粉什信第二局狹斜大道廣

多之相連過而東足指漸低其素祠均寺
諸舊深可人則嚮西望冬多山翠中
者而遊者不覺其為山但稍南者路頗
阻隘是為第四局隔而下瞰又得大橋如
第三局者橋西一支碧為第二局南分
流派橋東南去度塘秋葉一飛橋霜
葉注為第四局所登之餘齋是為第五
局之勢雖變其實一水自山望城見水
明滅煙塵之際如蛇在身也故畫之

圖者宜卷多宜帖之取區別甚之派通
焉爾然派通之中亦須具區別是□□君
所以畫此橫披圖又細畫如沈夫鴨河可
遊其夥如此非貫穿出沒用通年之
力不可究討其雖系身係吏務難於展
出加宅依衙門在城西極或數月不到從
後一到不覺窺斑無能中其係貫也
故信工描寫多驪視唯一幅橫披名諦
觀則五局變態瑣細畢備不必理杖

勢尊出城區橋而某丘某水生可指
點而其維素履之數尺者名極之曰溥
領向時出偷視如卷軸重大則不係卷
舒有礙耳目高其用意亦若矣余鄙人
宗京者然刻愛鴨河風景再三僦居不
離河萊亭在所謂二局三局之間而身
在羈絆得溯沿上下肆快尋披亦不厭
為君津——道之云
乙酉區秋十又三日山陽外史賴表書于

三楹村僑居山紫水明處



先人嘗撰鴨河園卷記東山名勝具備記中頃謹舍主
人謀刺東山名勝編欲併刺此記求乞稿本家幸存先
人所手書之原稿因摸寫一通與之記云此園宜卷不宜帖
以帖區別而卷流通今所刺更卷為帖却與記所言反焉
蓋觀畫猶讀文者逐段求之可領一篇觀畫從區別而得
流通亦可以盡全圖之執是主人所以改其觀欤賴復識



雪後望東山

風雪初收好放眸牛王廟畔使人留
圓山華頂高低樹擎出仙家白玉樓
東山花樹歌贈六如上人
洛陽城外鴨川流川東花木映青樓
青樓直接牛王廟桂殿蘭宮佳氣浮
東風徐傳鈴索響賽神多是屬春遊
花頂山門與雲齊金榜照夜望不迷
鸞翔鳳舞青松外紅蓋粉葩錦作蹊
圓山本自香火場何歲變作歌吹鄉
豪家張宴無虛日簾幙風撲沉檀香
少妓寶釵金翡翠妖童羅襦繡鴛鴦
鴛鴦翡翠芙蓉帳玉饌桂醕琥珀觴
只道妙舞堪悅目寧知纖歌能斷腸
長樂雙林花天地香霧濛濛不見寺
葛原已入闌闌中菊水僅存牆壁裡
榮枯千年真陵谷豐王霸圖留遺蹟
高臺今覩丹青新啼鳥弔古閑花纏
開花啼鳥簇絳霞靈山亭子眺望遐
繡陌三千連宮闕碧瓦粉壁十萬家

江村綬

全

萬家春樹帶暖烟遲日好尋清水邊
峻嶒悲閣花間起春遊何處不可憐
可憐春遊春將暮棣棠踈躑花滿樹
真勝寺畔歸去來陌上香泥落花雨
別有藤花掛松枝恰似天女華鬢墜
藤花纏綿春不住東山花樹能幾時
鶯夢蝶魂人間世往事茫茫鬢絲絲
何若已公第屋下東山依舊翠落眉

賦取愛東山晴後雪

花開每言花似雪雪來又喜雪飄花
花之可愛不須譬雪之可賞又何加
行樂東山四十週諸盡花雪誘風流
昨結色界春風夢今趁玉戲無上遊
地隨其時換其景到底延人等解愁
雖等解愁有不等清比富艷更覺優
踏瓊碎瑤元高逸總香憐影皆冶柔
况是歌吹吹彈窟糟鼻肉氣撲鼻稠
老來持心水蘂均耻為謝安拜後塵
一夜風緊凍雲走卧後晴雪示清新

中嶋規

紙窗撫枕喜不寐
蟬行蠶食聽來勻
斯頃天曉更點盡
先仰東山白嶙峋
嶙峋慣說三十六
一般化得酒爛銀
此時不類平生者
一味清寒入詩神
恰似嬌翠媚黛子
一旦僊去朝玉真
我亦對嗟如換骨
無復少壯舊惡因
惡因屏斷今如此
初諱冷峭堪作儉
不喫苦茗不呼酒
東山妙景歸一身

平撫群蠻不藉節嵐光一一撲眉濃

前人道破全都景軟翠連東有卧客

賀茂河一名東川西宮或鴨河鴨羽川云云水源洛の北山貴布祢川岩

屋川以下の諸流合京師の東郊を過ぐ名高き大川ゆく往古より

洪水の時洛中へ暴漲汎濫庶民の憂外白河法皇嘗て詔り朕

が心小任せぬ者雙陸の采賀茂河の水山法師のみ此故小大内裏の頃ハ防

鴨河使此職を置又中古足利家の代永祿年中霖雨降つぎ賀茂河貴布祢川

いふ小成る万里小路文字小押洛中河原成六檢斷人と々と驅催

普請せ夏室町殿日記見えたる雍州府志云賀茂川北方雲畑より出水上村

経上下此賀茂小出之間石川蟬小川等の名なり而て紮杜の南於高野

川と合ひれ依り紮或河合と称を而て二條三條の橋下と過ぎ大和橋の西小

旅白川と合云第四第五橋小枝橋等を経り又桂川と合り淀橋の下小至て

宇治川と合終小難波津小出海入同書云斯川水源至清り自ら

中華渭水の清小比と云高瀬川上二条の東の上より鴨川を引け三條

北の方より東南を流れ伏見の西と經り就橋の西北アソの間則解倉了意の堀

御集万々と秋の夕夜小此波の音かここも鴨は河凡

夫木ゆくく花らうらいまさひ岩は夜の御月夜のか茂の河凡

筑後撰さらののる鴨の羽川流れかみと思へく久し世くは瑞名難

長明無名抄云石川瀬見小川是々賀茂川の實名をり當社の縁敷小侍王云

新古今鴨社の歌合々々

石川や鴨の小河は流れ月入流き成身ねてや心

毎トあはれぐさわやせま 水さの船の川風は 千種
有功卿
おろひり 五七拾五 けり 水さわ けり 川の川

一月樓ふまみくろ時

先づりーくふれは 河原の初ま けり 布さ ぼ
か茂川は けり けり けり けり けり けり けり
幸だんは けり けり けり けり けり けり けり
鳴つれ けり けり けり けり けり けり けり
誰ぢふ眉は けり けり けり けり けり けり けり
か茂川の けり けり けり けり けり けり けり
の けり けり けり けり けり けり けり
名を けり けり けり けり けり けり けり
か茂川の けり けり けり けり けり けり けり
文わ けり けり けり けり けり けり けり

景樹 全 全 直好 雪臣 祥重 信美 長峽 惟貞 豊城

不著荷花 不受舟 樓樓住 在岸東頭
只應萬解 臘脂水 瀉作瀑 瀉一道流
中嶋規

三都春曉之一 加茂川
雪白花 梢鴨綠 波東山 欲曙露 坡陀
樓閣閣 豪華海 猶瑣春 雲好夢多
全

鴨川原 出子葛野郡 畑村 至車坂
與諸溪流 合為一 傍三十六峰 南
走入淀川 平時可 揭及春漲 秋水
則使河伯 拊舞聞 豐公嘗 分派其
原爾後 暴漲不復 如古所謂 三害
之一也 嗚呼 豐公可 謂能治 其本
者矣 今茲 官起役 浚之 都人助
功 每街出 車錦綺 張幟 扮裝 爭美
舞蹈 運土 昭代壯 觀儉 幸寓目

紛羣助 役子來 民舞蹈 狂顛 簌鴨濱
東客初 疑何 祭典彩 車運土 捲紅塵
靜軒

四條河原納涼

六月七日之夜より十八日の夜に至る四條河原水陸寸地を漏さば床を
 並へ席を設く良興般樂は東西の茶屋地燈を張り行燈をかかげ
 恰も白昼の如し是を川原の涼と云ふ按る小是遊戯の納涼あり諸人みな越の技と
 なることりんの神慮をうたふれば十三日の夜に至る八咫圖の宵宮と云ふ殊に賑はし

鴨水納涼之夜遊自六月七日至十四日為最盛矣
 相續至晦日夜々四條橋南北涼棚茶店鱗次擲比

か茂川や維やわたる星は夕
 鴨川やちりり啼くや九條まぐ
 か茂川の河原まぐ
 鴨川北より都の天竺川
 か茂川の能く啼けり考のる
 都はるか茂川あり夜まぐ都
 か茂川や三條まぐか茂川はる

士朗 樗堂 月居 魯隱 蒼虬 梅室 全 若夢

兩岸一帶皆妓館分茶酒鋪羹店雜錯其間小脚店
 則有泥鰯團魚之羹紅鬚青鱗之鮓諸色海味諸色
 素食下酒下飯零碎作料不托水引河洛合羹胡餅
 餃子牢丸包子糖糕糍糕諸色糖果西瓜甜瓜林檎
 杏桃楊梅諸色水果琉璃店則魚餅葫蘆鼓鑼鐵馬
 燈碗各色盞碟雜貨則煙管煙袋各色摺扇團扇梳
 篦髮朶釵朶香囊彩勝水上浮紙畫兒遠視畫凡兒
 戲之物泥孩陶犬惜千千類叫子之類名件甚夥不
 可畢數伎藝則走索戴竿吞刀弄丸藏擲劬斗傀儡
 角觥口伎影伎獼猴猫鼠之戲演史學鄉談詠話
 種種無所不有竟夜火炬燭天絃歌鼓吹嘈嘈鼎沸
 驩笑海湧遊者不覺達旦

豪華萬種付潺湲即是我郡銷夏灣
 恰々連宵無一雨綺紈絡繹不知還
 曲曲清波月近牀紅羅白苧坐吹香
 水肌寧怕人間熱只為風流趁夜涼
 轟鼓繁絃徹五更戲臺擲比駐行人
 相逢只道搜涼去滿耳何知有水聲

畫餅居士 全 全

鴨河納涼賦

鴨水出山，僅百里，纖塵不動，鏡相似。
河上，千人萬人出，平安六月，暑如燬。
白石清淺，不受舟，垂楊風外，架絲樓。
日没晴空，青欲滴，一帶銀河，兩重秋。
燈火星點，光破碎，十里珠簾，齊上鉤。
繩妓環佩，空中度，蘭子九釧，電際流。
雜戲百出，愈可駭，不省葛衫，露氣浮。
馬上，年少錦連，乾餘酣，渡水愛清湍。
紫鱗拂机，欲飛去，霜又無聲，雪落盤。
解醒重傾，鴨河春，雪乳水糖，不當餐。
隣棚佳人，相招手，隔簾喚取，接新歡。
越羅綵絲，飄香霧，避風臺上，玉肌寒。
城東擊柝，第幾更，蹄輪漸稀，夜轉清。
落月動沙，沙作霜，迎岸高烟，所次生。
遠處簾櫳，熒熒燭，靜中絲管，細細聲。
幾處結思，楊州夢，何人泣別，淇水情。
紅裳傳書，青衣走，問門竟夜，有送迎。
君不見，永昌橋畔，銷金鍋，涼風偏傍熱。
客多恨，不縛鷄，投狐狸，玲瓏奈曉。

六如庵

何

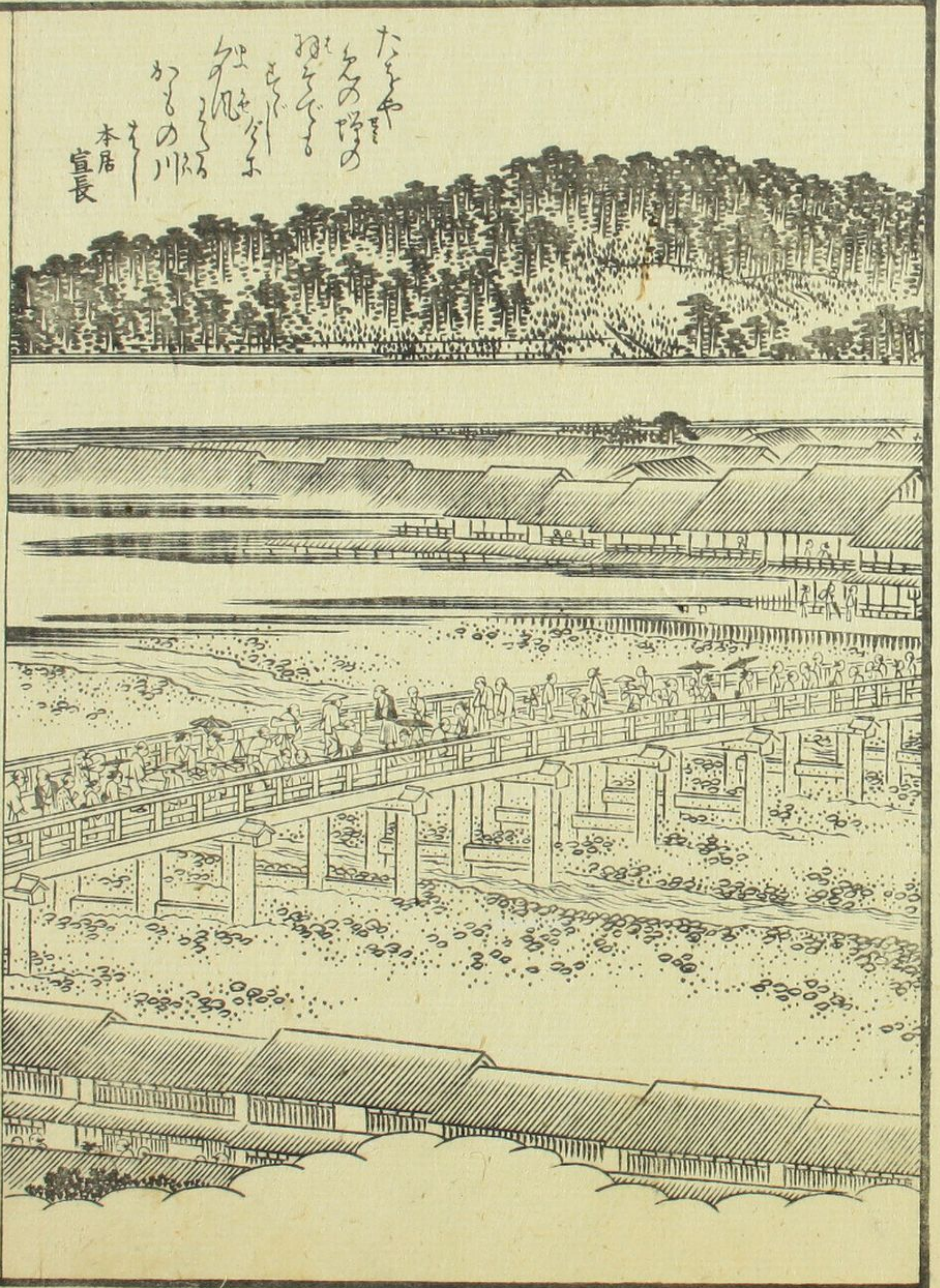
不泛游舫，不架棚，小床臨水，有餘清。
晚風柳外人，如織，半里平砂，既可行情。

梅窩山樵

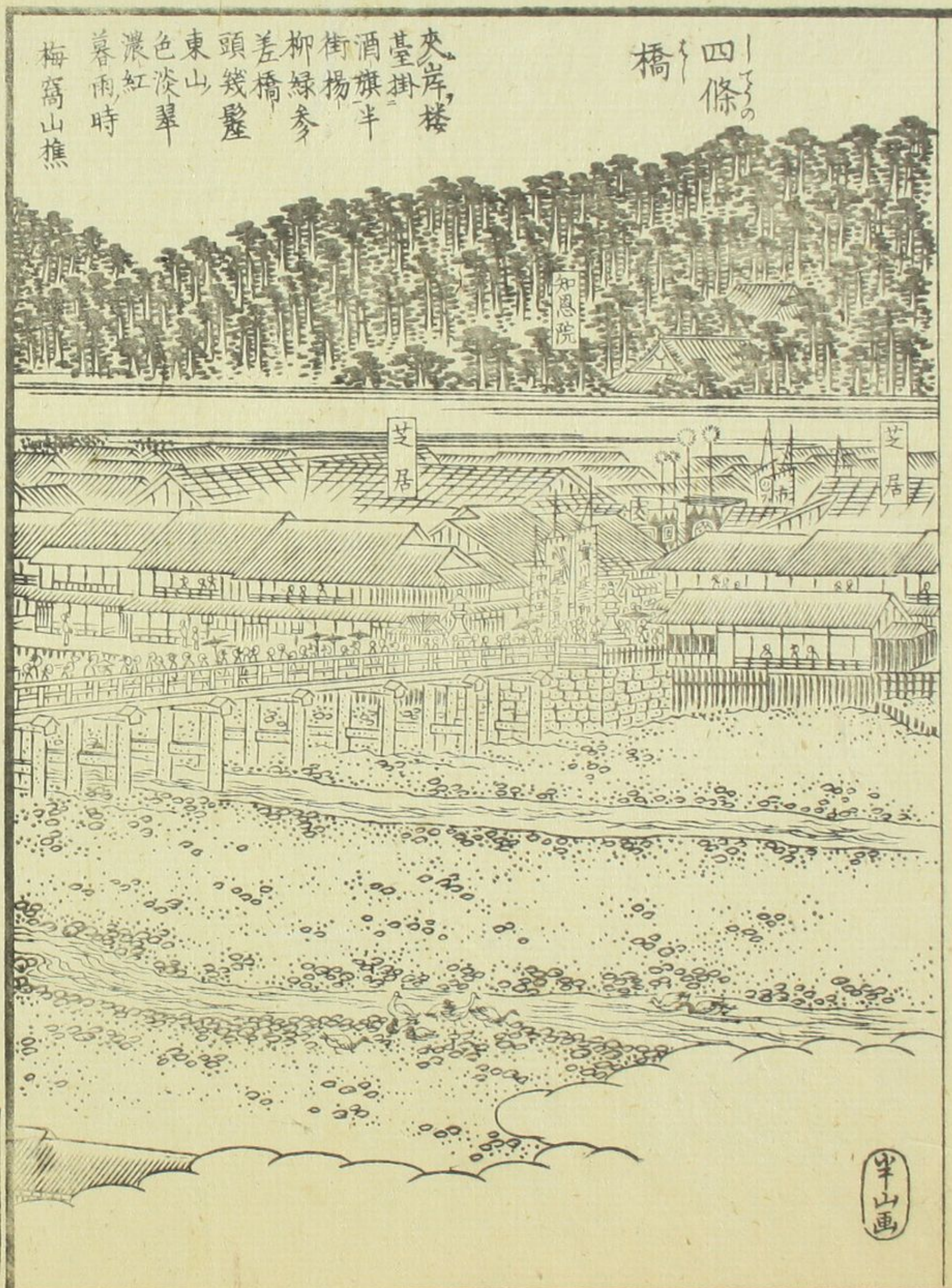
水之北，野之川，原之大，水之清，
舟之遊，舫之架，棚之小，床之臨，水之有，餘之清。
晚風之柳，外人之如織，半里之平砂，既可行情。

千種 有功卿

加茂川の西岸に榻を下し
文山の口よりさたりゆき
杉水は四條より流るる
芭蕉
蘇村
蒼虬

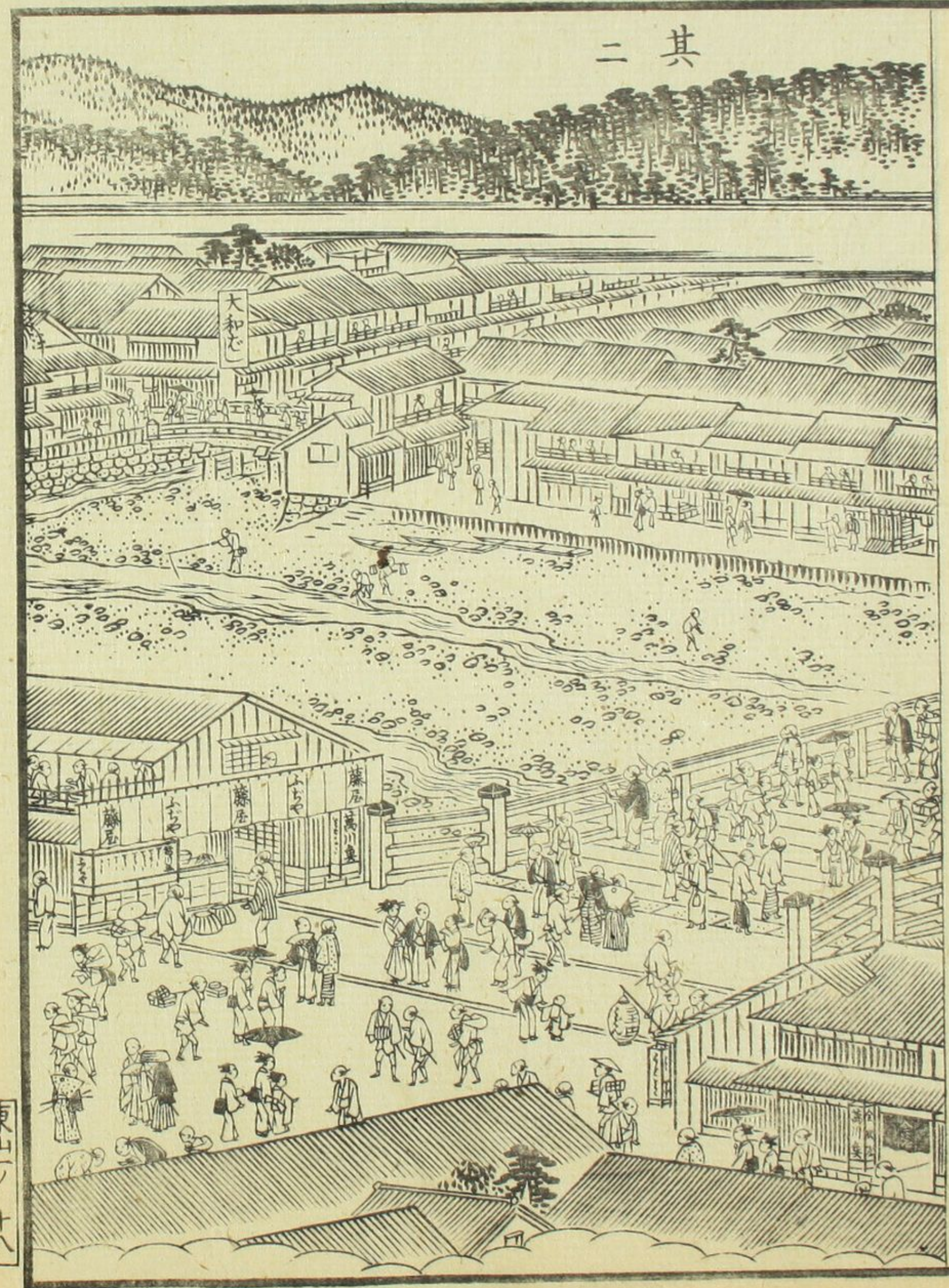
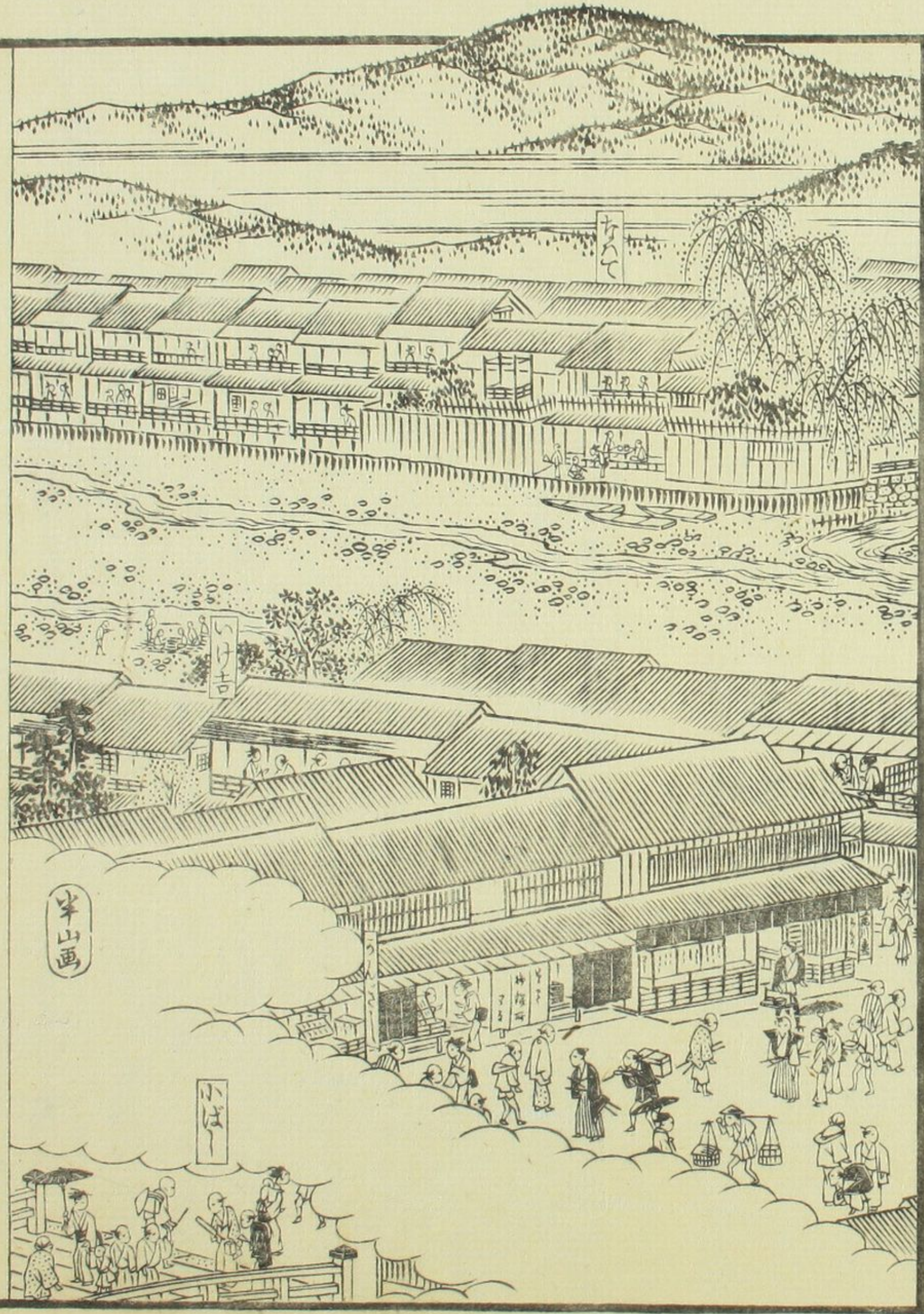


たしや
 ののの
 おのの
 知
 の川
 本居
 宣長



夾岸楼
 臺掛
 酒旗半
 街楊
 柳綠參
 差橋
 頭幾
 東山
 色淡翠
 濃紅
 暮雨時
 梅窩山樵

四條
 橋



四條橋

四條通加茂川より長き五十間中三間石柱の板橋より高欄つき

石柱數四十二本安政四年加茂川御凌の時架りたる所なり

往昔當橋の祇園四條橋と号し三條五條小等も官橋たり祇園社家條々記

録云鳥羽院七十永治二年始祇園四條橋為勸進聖沙汰且之云是當橋を

架るの濫觴なり按より小永治元年七十五代崇徳院と鳥羽上皇廢し一讀波國小遷

然下政道の事多分鳥羽上皇つとせしむ則永治二年八近衛院即位の年也

故小此記録云鳥羽院永治二年書とあり雨後十三年を經く破損ゆゑ小

造替ありと見え久壽元年七十六代三月廿九日祇園橋を供養とあり百練

抄小見えたり又其後七十五年を經く安貞二年七月廿日風吹雨澤洪水泛溢

四條五條の橋流し落るより同書小見ゆ然る小兵範記小嘉應元年九月廿一日

已刻むり召りたる院院參り二條三條の末河水はれ車馬通せり遺下七條の

末淺瀬を尋ね參入と有按より小三條とひく四條とひく蓋四條の橋より

二年上る前中又百練抄小寛元八十七代正月四日去夜祇園西の大門前大路在家

南北両面地を拂ゆく焼亡西橋小及云按より小以時橋ありとあり安貞二

秋間小安貞二年小損せ弘安七年九十代後閏四月十六日一遍上人関寺より四條京極此

橋の再興ありとあり

釋迦堂小入給ふ所の園園四條の橋ありと上人の繪詞傳小見えたり貞和五年

九十八代六月十日西源院本撒の沙門園四條の橋を濟せん新座本座の田樂

成合せ四條河原小棧敷とあり園八十三間小三重四重小組上物夥揃たる様の

面とさむ曲をれ忽ち棧敷二百四十九間倒る打殺さる者五百人其外殺傷多

其次日終日終夜大雨洪水昨日の死人汚穢を洗流し十四日の祇園神幸の道と

清む太平記小見あり按より小弘安七年より貞和五年九十六年也され弘安なる所の橋建武の

大外記師其記曰應安七年二月十六日四條河原橋の事始云一向勸進僧の沙汰也

按より貞和五年より應安七年九十六年夜聖紀翁著曰細川頼之の家譜祇

園感神院比叡山西塔の二院三千坊の數入山門の衆徒憤ある時山王

の神輿と都小振奉るあり免給六其勢とあり祇園是本

なり神輿とあり昇出大神人甲曹とあり四條河原の橋の左

右に穢ものを拂ひ流し法螺と吹列障旗あり太刀を拔拂き

とあり按より小細川頼之八明德三年三月六十四歳卒ひ寶徳二年百三代後六月七日

云此四條橋應安七年より渡りたる橋とあり

朝ふたり俄に加茂川洪水漲出、三條五條の二橋損下、落又々八月十六日、洪水
水つゞく三條五條の仮橋を流失せしむ暫くは往來絶たり即時に橋を損じ
剗て坂兩度、聖護院村以下二條新地、南白河筋まで一圓子暴漲、西川縁
高瀬川等々急水溢し其餘波五條橋下に至り六條七條新地の家々を浸し
衆人難渡ふ及ぶ誠ふ近代未曾有の水害なり、加茂川兩川添町々申談下河
浚の事を此年秋願ひ奉り、公に改三辰年の春改め、公より加茂川筋附
洲浚御普請仰出され、五月中旬より始まり川上加茂大川川下鳥羽小川兩岸の堤高く
築あげ川の中央を深く掘り給ふ此より二條より七條まで川添の者共云ふ
及ぶ洛中洛外の町々より日毎に數千の女競ひ出く土砂を持運ひ七月の初
至り速に御成効ありせむ爰に往古四條通の東加茂川大橋がらむ祇園橋と
稱下流を宮川と云ふ彼御やろ歩を運ぶ大路がらむ上年々の祭禮
に浮橋を懸き神輿を川邊より昇出く水を滌き奉るも俗にみり御被
川の絶れ謂をうきむる本橋永く瘵と唯假初の小板橋をりて出水の

度毎に漂ひ流る夏を、さうゆねに往來を、街を、衆人、れと憂ふ
事久く且今度御普請の後、此仮橋水行の障あり、聞へ下古京宿考
及び祇園神輿、轅町氏子從二条通町々其外祇園町同新地六丁の者も申合せ諸
人濟度のたぬ殊に祇園の大神に冥慮し、叶ふと四條河原本橋新造は、夏を
公願より同年の冬御ゆる、以蒙りて、即十二月朔日より取り、さう川中、四
十二本の石柱を築立、長さ五拾間の板橋を敷け、中三間今茲夏四月、此末
經營もつた成就、ね斯く吉日を撰四月廿渡初式行、れ、此事、小管、さ
下古京を、け、祇園、轅町、并、産砂の地、い、更、さ、京田舎の人々、ま、
歡びあ、る、事、限、り、實、花、洛、の、一、壯、觀、や、今、後、加、茂、川、筋、を、く、洪
水の溢る事、さ、此橋の往來、ま、盛、る、
西石垣四條の橋の西、つ、り、寛文八年、加茂川の河上、兩岸、新、た、石垣、を、築、せ、給、り、川、下、
市中、ま、い、石垣、を、築、立、く、洪水、の、防、ぎ、を、せ、り、故、石垣、地名、を、と、り、
當橋、辺、皇、都、第一、の、繁、花、や、貴、賤、の、行人、晝、夜、小、群、を、恰、も、鼎、の、沸、り、が
如、さ、る、程、子、青、樓、貸、食、擔、を、列、ね、河、海、の、鮮、魚、諸、鳥、の、煮、賣、魚、類、精、進、の、酒、飯、の

餐應温飽蕎麥切餅饅頭菓子木杲其餘新奇の食類店日々増益酒
池内林本勝了ら就中生洲の樓東山望や月雪殊小絶景なり古此傍辺雨
蛤の酒店より招牌の行燈大雅堂の筆跡なり今其家絶た惜じき事以り
東石垣 同橋の東岸より以折し西小ひり貨食家茶軒清樓娼家川面小建列王昼夜絃哥の
於茶漬屋のよりまろりちむりふりふり繁昌し客の絶る外東都の曲亭
馬琴翁の口演の額あり今尚傳へる店小掲ぐ筆のつゝ小左小記せり

四條戲場 四條の橋の東より延室四年奉納の祇園の繪馬は南側小三軒北側小二軒繩手通四條の北側小
一軒あり凡六箇所あり尚安永のころより北側小三軒あり東の芝居西の芝居といふ
則ち三箇所あり今西の芝居は北側小三軒あり南の芝居は東の芝居といふ
此所四條中之町と号し芝居の左右は芝居茶屋軒といふ者あり
朝入り来客見客と伴い敷物毛氈とて下火鉢燗草盆携へて酒食をけし若菜など
入る引入行ふ夜陰の打出小至るも静かなる備小繁昌のちりなり

南側大芝居 大歌舞妓座なり 名代郡万太夫布袋屋梅之丞と云
北側大芝居 右小同一 名代早雲長太夫亀屋糸之丞と云

歌舞妓元出雲國大社の巫女小於國といふあり都小登了神樂を轉し歌舞
是古小所謂白拍子の類なり元神樂の變風なり時小永祿年中小江川の
浪人名護屋三左衛門ら小者以て國をたひ歌舞妓と号し男女立合の狂
言を仕組祇園社の南門小於場と開き之を催は是歌舞妓の濫觴也雁州府志
尔後北野の赤五條河原橋の南中興行より小豊臣秀吉公伏見城より上洛
給ふ時見物群集し坊小及小故小四條の河原小移り茲より遊女は長
佐渡嶋某遊女の娵者なり歌舞を教へ並びに能藝を施さしむ良賤
群を聚くこれを見り誠小人の心を誑け者以て過たるなり茲小より女藝を
禁せし後小又小娼とて藝を施さしむ狂言盡と称し男風の流行女
流小減せり故小又法制あり斯く暫く中絶ありと今の如の風小衰
兼應二年小村山又兵衛ら小者四條河原中嶋小於再興又繩手四條の

北きつ下しも一いつ遂す小こ寛かん文ぶん年ねん中ちゆう小こ今いまの地ち小こ移うつ常じょう芝し居いととなりととぞ
雍州府志曰芝居の外門闌は上かみ高たかく床ゆかを設たまけ外とほ幕まくらと張はる其體城
樓ろう小こ似にたる故ゆゑ小こ櫓やぐらと稱いふ曾いつ板倉伊賀守勝重京北尹の時櫓七箇を免ゆるは
七箇所芝居の外とほを稱いふ事能わざば櫓やぐらなき者もの小こ芝居と稱いふ云い按おず小
以七櫓の丙座うすざ此こ在ある余あま所ところ小こ分わかれ相續つらな今猶繁昌いまださかなりと
當丙座とううすざ所謂歌舞妓の大芝居おほしづや三都さんとの名能優常なまのう小聚ある興行
ちちはと間斷まんだんをと四時よじ繁昌さかんなりとと別わかく霜月しもづきの顔見世かみせ頭あたま盛
やや豪富ごうふの左祖錦綴さそにしんじゆ子毛こけ纏ちんやや米炭薪酒魚類こめすすきいしよゑいと愛あいむ所ところの能
優う贈くわ了勾欄こうらんの表おもて山やま如ごと積上門つみかみを壓おさひ街まちを填みぎぎ行人こうじんを阻とどめ員
懺ざん所ところ披ひき立たちを舞臺ぶたいの燭臺しゆくたい棧敷せきしきの桃燈とうとう夜よににり看客かんかくの大
勢せい山やまの如ごとく集つひ四よ面場めんばう上かみ小萬燈まんとうを照てり歌妓かぎの揃町そろまち方の婦女ふにょ美み麗れいとと々々
群ぐんととちり言こと語ご小純こじゆん座ざ附つ引ひ合あせ小手打連こてうぢれんの名曲ななうた小數萬すまんの耳みみと澄すみ厳冬
の曉天あけぞらとと陽氣やうき充滿みみ寒冷さむを知しる其盛さかなり事こと三都さんと小魁こけなり

都繁昌記曰顔見世之一劇熱鬧極矣理當在大坂沃饒之土
而却盛于我清肅都下此亦一奇如江戸則固極其盛美吹屋
町場町木挽町之三街劇部戶戶總以十一月朔為履端如從
周正者供歲糕奉春盤臨街屋檐上作種種華飾爛燈徹明場
內亦有多少舊式莫不壯麗然我郡兩劇之所以不相讓者在
座著手打之一事座著者謂諸優著坐于場面謁群看客之式
也手打者謂好劇之遊冶少年候諸優著座立其面前齊鳴拍
子木贊揚其勢焰也此輩皆良家子弟而拋煙華鄉之餘結社
稱手打連中例歲顔見世初十日間逐曉入場作此伎其狀頭
纏彩手帕脚踏紺黑或紫綠之襪子華衫必短文帶必耀軒靴
浮泛之習公然不顧人嘲笑蓋其所自詡在拋財誤身呈痴汗
面之外宜矣自昔人呼作癡物第一番然百年來不斷其種亦
屬都俗繁昌之一條耳凡顔見世之例四更既過櫓太鼓諸優

通上勾欄每一箇出右邊小幕衆從內轟之連呼阿梨也阿梨也坐通卷頭先進拜伏中央兩時手打連中輩出而當其前各把紫檀紅繩拍子木齊拍而節贊揚之新詞曲大抵倚三絃間用雜器要在助拍子木其音或急或緩或低或昂如流如逆如喚如應一紊一勻憂憂切切翻飄砧飛拚之驚傲金聲玉振之優鼓動之妙有難以字色寫者一曲已了則優始舉首并掌而又自稱其名謝贊揚之辱且陳乞憐顧于全都之情語雖各有小異皆以乞滿場自隅至隅之御員履為結終一箇已退一箇又進至卷軸優老而止手打新詞之長短繁疎隨優家之甲乙自有區分如優童稱子役者使四五箇齊進座併而對拍之拍罷拍起兩刻許事了則諸優又逐次一拜而入幕去此式之於優家最為光榮所以皆著禮服肩衣單袴通俗稱長上下之正裝也如若女形則戴紫色小巾垂繡紅脩袂猶服長上下陰陽

不分之體此輩結習不可必尤

大和路

芝居の東より右へ通る路也。三條の橋より南を經て伏見豊後橋より通稱を以て此道と稱す。南の方大和國小郡と云く斯く号するは此道方廣寺の前より大仙門前と謂ふは此所へ左右田圃中へ横に繩子の以て彼小民家あり故に元結と製するものも此住路傍に元結と予に製し旅人おのりて今尚余風遺るは此所の名物と云く繩子元結の間に世に高

大和橋

大和路三條と四條との間あり是白河の流賀茂川に入る所なり大和路小からと云く大和橋と云く石を以て造る橋なり此橋の北は辨財天町と云く此古辨財天の社有

雨止地藏堂

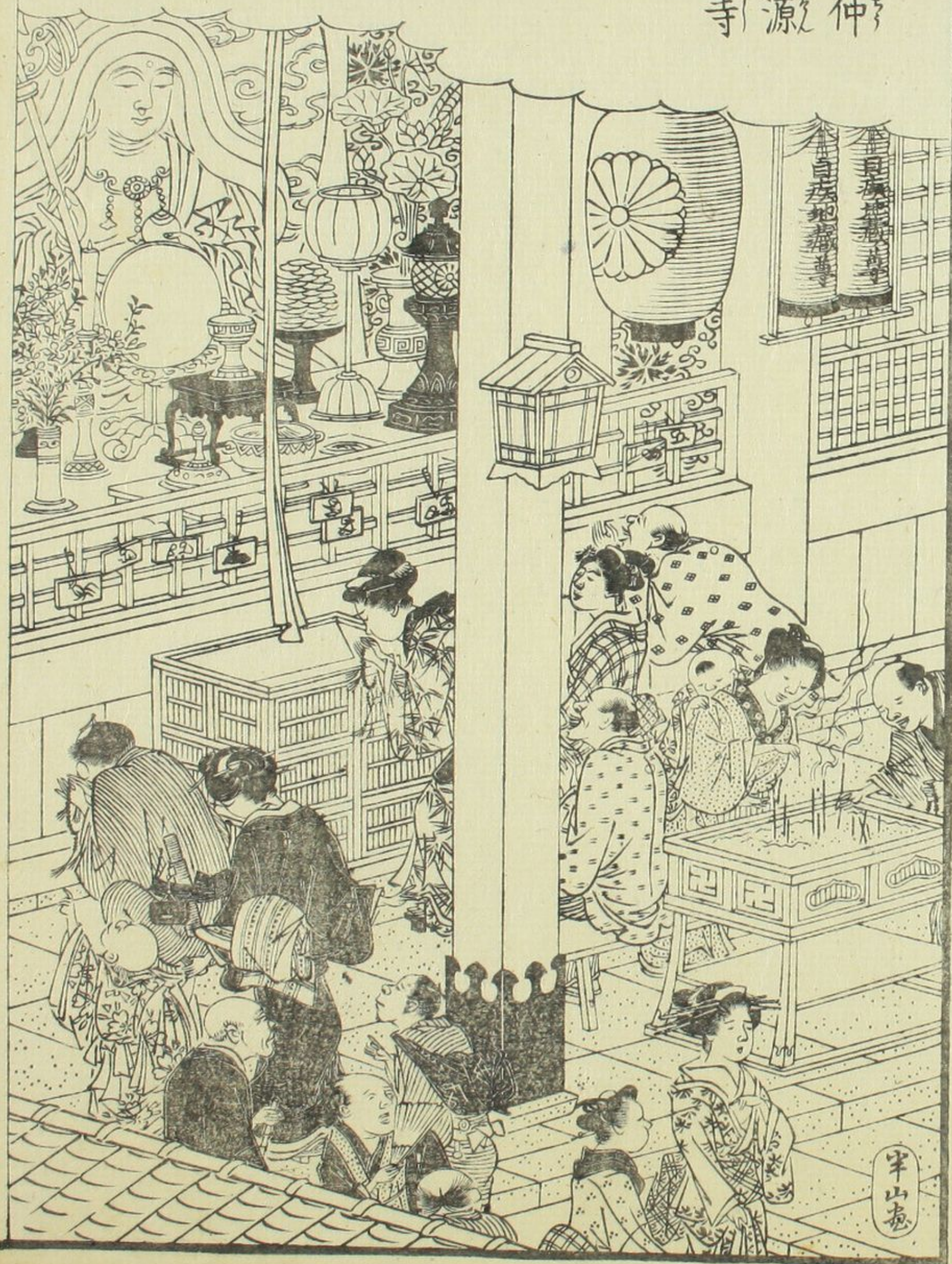
大和路四條の東南の角あり中間寺と云く或は仲源寺と云く此堂は傳云中華教化人塩瀬淨因建立の大檀越なり云淨土宗お智恩院小願は

本尊地藏菩薩

好六の座像定朝作或は土中出現と云 股士 阿弥陀仏 徳心僧都作 行基僧正作 或は春日作と云

雍州府志云此寺舊四條東北の田間今は芝居の所小在故世小畔の地藏と云寺僧傳云後堀河院安貞二年秋八月大風雨鴨河洪水漲り出勢田判官為兼小命トク之を防ぐむ為兼忽ち異僧小逢ふ僧謂らく此水入力を以てこれを防ぎ難此河北小辨財天と勸請又河南小夏の島の廟と建立一祭祀と勤修

仲源寺



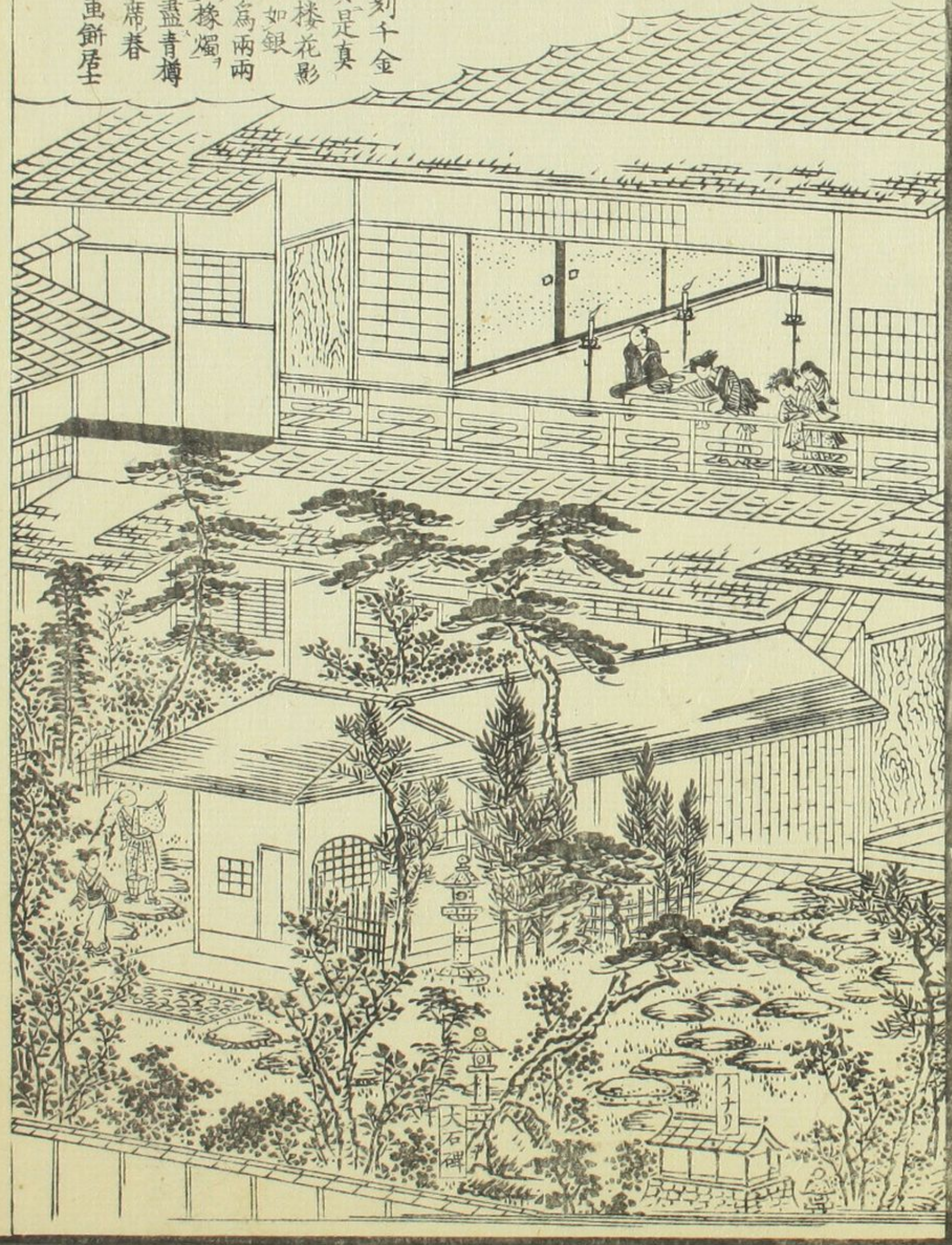
半山表

神明社

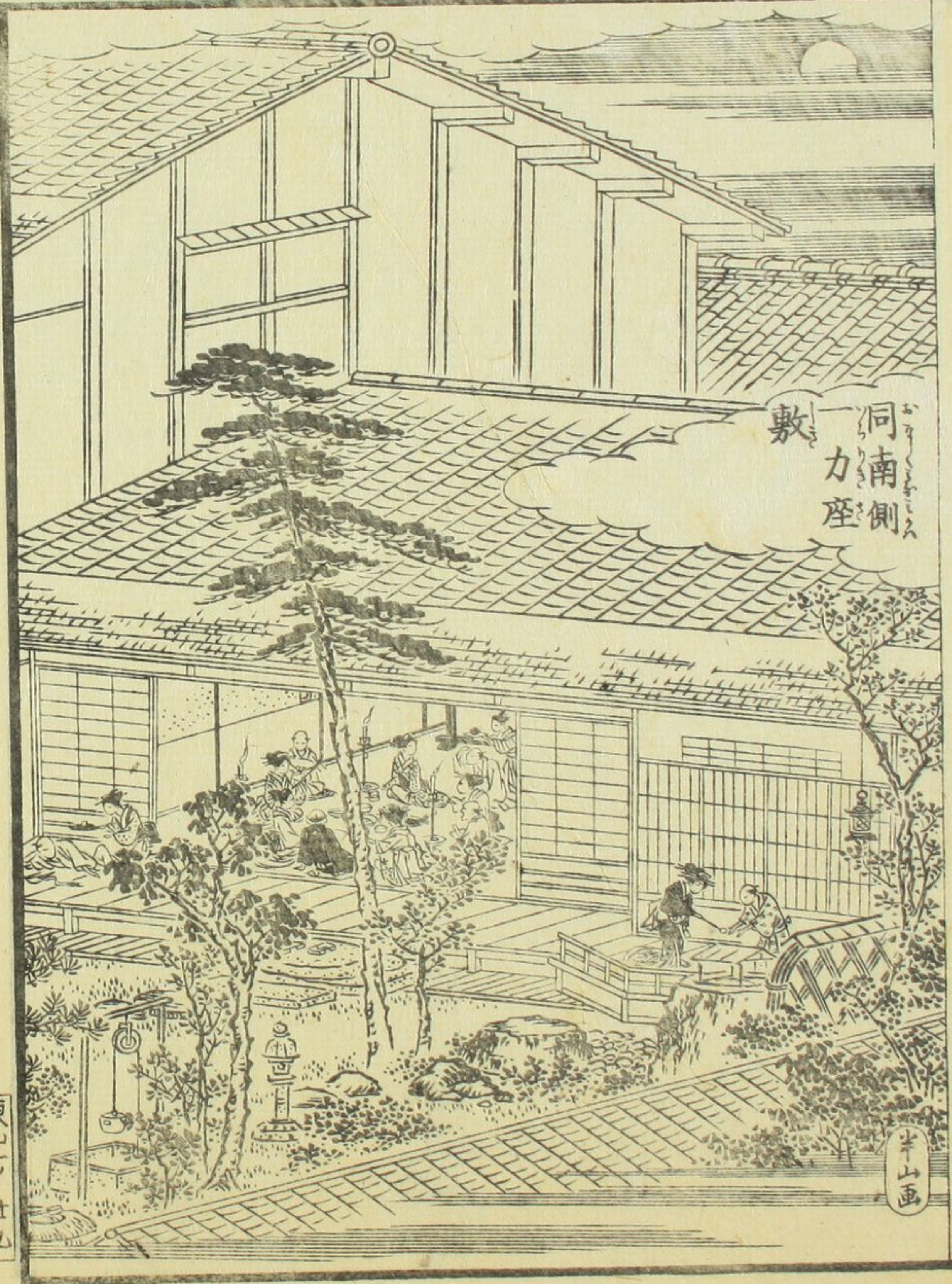
地蔵堂の西の角なり伊勢大神宮を勧請して社近世大に破壊なりと祇園の妓婦女伶れどもが競い奇進寛政十年の夏再建し壯麗なる神殿とせり

時水立るる乾く云終見為兼思へく是地蔵尊の現出する所なりと
 茲小於雨所の経営事好水果と枯其後兩社廢壞今其所を知惜哉と
 云一説小禹王の廟近世至ア九條松原通河の東存云又四條の南鴨河の西中島近世至清
 塚と稱するのあり此辺夏の禹王の廟有云今更其跡と云は弁天の社則前大和橋の北吉野有
 諸亦此尊前小眼疾を患う者祈願を懸せ靈驗たりたり病苦乎愈に
 故小世俗目疾の地蔵と稱す實雨止の地蔵なり其故往古此辺家居く田圃
 の間小此寺なり畔の地蔵と云ひ時往來の衆人驟雨の時小此堂雨宿る
 兩止を待たそふと雨止の号以蒙るそとなり然るを眼病の靈驗は因く
 目疾と轉語せしものぞ
 弘法大師の依の兼師小方丈小安置は傳云股士の十年觀音東山雲屋寺の
 本尊なり又説大下河原柱橋院の本尊なり云志孰身好くそそ
 康富記云寶徳三年九月廿九日祇園横大路北類大仏の堂小於菊の一覽
 了奴云是則當寺の事に元大和大路の西四條の北類なり後世大和大路の東四條
 南類小迂は山城名勝志に見えり大仏なり今の地蔵尊なり一説小此尊像ハ
 夏の禹王の像なりと世俗仏と云ふ風小より其像をりたり飾り遂に地蔵菩薩と
 一書小此寺ハ古當所の物堂なり毎年七月揚燈籠を燃は是古の遺風也と云

一刻千金
 真是真
 滿樓花影
 月如銀
 無爲兩兩
 難揀燭
 照盡青樽
 綺席春
 画針屋



洞南側
 敷力座



右南北兩座の勾欄を祇園町同新地の繁昌鴨東四時詞及び同註
 委しんんが就く見るなる九一年の紋目多き中やわさく水無月の祇園
 神輿洗五月晦日小娼妓の店々々々小婦の美貌を運びさるの姿お扮
 大路をゆく行是を透物や称々遠近より見物の集ると幾千
 万人を知らば是洛東第一の壯觀なり其概略左の長篇を寫し爰お抄出

祇園祭優行

太田賀象

百世不遷平安城四方鎮護多神明
 皇家祀典存常格歲時享祭報昇平
 土地城堙廟祝史祀事習俗各經營
 就中最盛祇園會神輿奉迎夏五晦
 擗舉丁壯幾千人祖裼裸體成一塊
 闕宮直下至行宮勢如波濤帶颯風
 遙拜貴賤相蹂躪散擲青跌飛晴空
 須臾巡行歸旅次此日狹斜綠鴨東
 葛原之街及新地八百女間指掌中
 許願還願娼妓輩祭優兩隊各競雄
 如今大率如恆例有凶京北係治功

頭會拈錢供費用官吏何管訖凶豐
 催促品類新趣向多擬演劇構奇工
 年年歲歲趣相似歲歲年年扮不同
 去年生且今年甲歲若嫗乙歲童
 此時牛廟靈鎖傍東西南北列賃牀
 淮南雙亭當墟女邀客相妬鴛與鴦
 觀者政立噴牆面躡踵肩摩動土崩
 狡狴門外石梯下一望綺街至戲場
 士女雜選塵煙漲驕陽時節勝艷陽
 翠簾高捲千樓晚紅裙映日庖厨娘
 姬姜玳梳者將落俯閱紙簿連綴行
 已報前導行燈見柵陳收聲暫停觴
 前席簷端屏息埃遙聞先鳴倡樂起
 隋宮剪彩彩移春檻爛熳牡丹回首視
 一樣衣裳紅羅笠吳紵蟬殼香汗濕
 緄絃繁手鉦鼓喧節奏淫哇聲習習
 休道絲兮不如竹賞音誰又論及肉
 肉味相忘三嘆餘響屨弓鞋逆拭目
 漸入佳境麗人部金蓮步步無蹉跌
 含嬌含態自舒遲標致由來皆殊絕

有脚芍藥活芙蓉芙蓉芍藥一何穠
 西施捧心楊妃醉了鬢夾侍扶顏容
 有仍鬢髮金步搖百媚千妍筆難描
 雷同犬吠呼所望飛焚掌舞迴細腰
 不讓霓裳羽衣曲梨園女優輪姝嬌
 摸倣秦王破陣看男粧抹顏如渾丹
 慶氏闢士應解甲角觥魚龍何足觀
 伎罷整列次第遷輕羅小扇相擁扇
 秋波斜寄稠人裏流眄多情在誰邊
 豈別熟識兼生面心醉魂迷轉欲顛
 行雲流水終無賴後進倡樂鼓填填
 君不見東都諸侯八百街墨水夜遊
 競豪華千艘萬艦烟花戲光燒綠波
 火似花又不見浪速管祀稱繁華河
 連燈船陸棚車檀持利兮聲霹靂豪
 奢繁華又何加祇園倡樂麗人部風
 流艷冶獨堪誇

更番扮戲喚呼頻品得妙年殊色人
 後隊旋隨前隊去幾雙團扇拂炎塵

画餅居士

越羅縠積銀麟蹙錦團窠紫鳳翹
 粧束戲衣嬌困甚香肌汗滴玉生煙

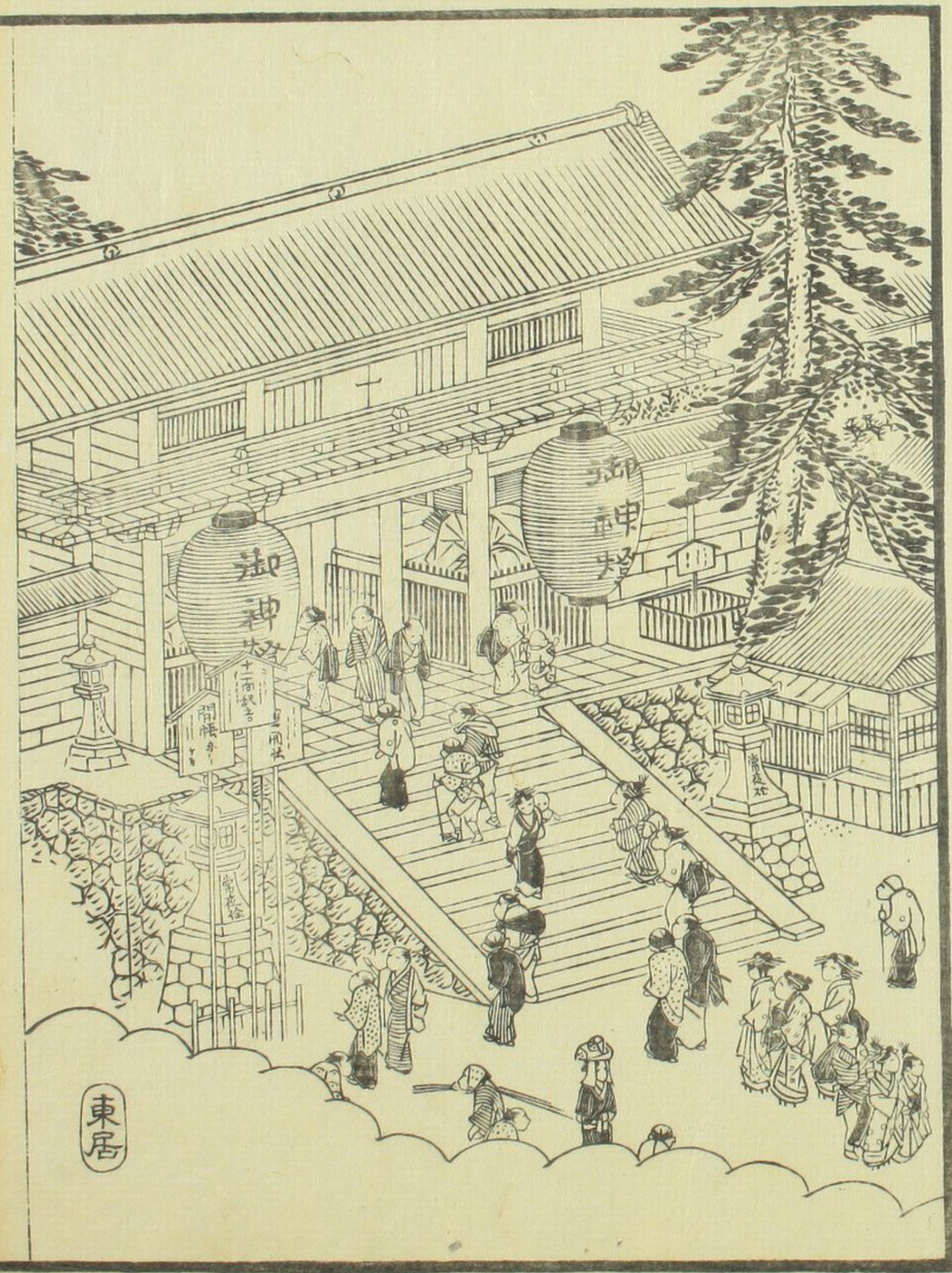
全

自注云祇園神會本日前後熱鬧亦甚矣五月晦及六月
 十八日在鴨河四條橋東洗淨神輿謂之御輿洗是日也
 鴨東茶坊娼戶結夥醜錢斂翠哀香演雜劇戲文故事其
 人物則扮娼妓爲淨且諸裝又纏結爲棚押其首尾衆則
 有三絃胡琴提鼓鉦鼓細腰鼓每隊珠翠錦綺香純自綺
 豔裝濃抹觀者每噴噴要不過勾引無賴子弟爲奇貨耳

祇園會のわりのをんくたふれふよ

野々
 隆正

まろわのものをさうりかきさへおのぞらあやのそを海のうら
 いろくのまはらうらうらうらひははのひちまふかのそのま
 名はねへまの天はまうはまのまをねうつまふねをまを
 こやこよりひまうつまふろ人の中おねまふまふらだち出た
 たり火おてりわやまうらうらふめまうらけら海ままうら
 つまうらまのまやまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
 たまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま



東居

祇園社西門
きよりのすうざいもん

黄壚連宇蓋仙娥
 人自天王廟下過
 泥首誰無乞福利
 賽錢甚少酒錢多
 静軒

人
 こと
 ちの
 世南



東山ノ三十三

祇園社

祇園町の東より此地に愛宕郡八坂郷より社額高石社務執行寶壽院
社僧八坊社司二家本願一家兼任一家宮司二家神樂座八家
本殿南向三座中央素盞烏尊

東間八王子

今若宮素盞烏尊の御子なり河内三女五男也田心姫
天忍尊天穗日尊天津彦根尊
本朝の神号あり

西間 稲田姫

本御前より素盞
鳥尊の御妻なり
獅々高麗狗 内陣あり
同 運慶作

拜殿 南向

中門 同 樓門 同 隨身の像 鳥居 南向石柱高十四間二尺圍
寛文三年震災の後酒井雅樂殿再建
四條通より石階十五段
隨身の像と左右より

相光天王社

拜殿の西より
日光社 中門の内東の方より
月光社 日西より
北より

宇賀姫社

兼師堂の西傍より南向
神明宮 宇賀姫社の向より伊勢大神宮と
祭る内外社相なり南向

龍徳稻荷社

太神宮の南より
辨財天祠妙見社 共稲荷社
美御前社 本殿の東傍より
西傍有北向

蘓民將來社

西樓門の内 後見殿 本殿の良の方より
大己貴命祭る南向
美御前社 西向

攝社末社

本殿の南傍より
白山大黒八幡松尾天神
御供所 向より
御供所 向より
御供所 向より

玉光稻荷祠

神輿舎の南より
神樂殿 拜殿の南より北向
御供所 向より
御供所 向より

御供殿

拜殿の西より
神馬舎 日後より木作の
繪馬舎 本殿の西より
神樂殿 拜殿の南より北向
御供所 向より
御供所 向より

かしの梅

神樂殿の北より紅梅の名木なり
多寶塔 本殿の東より二重の宝塔なり
寛政年中焼失
今より近年より
観慶寺 本殿の西より
本尊薬師佛 立像六尺三寸
股士 立像二尺七寸

観慶寺

本尊薬師佛 立像六尺三寸
股士 立像二尺七寸

當寺

貞観年中圓如上人の草創
五十六代陽成院の勅願所也

美平五年六月十三日

觀慶寺を以て定額の寺とす
始り法相宗なり

後天台宗

改む慈惠僧正中興なりと縁起小見なり
平寺寺縁起云觀慶寺
七仏兼師の頁也

愛染堂

兼師堂の向より
元三大師堂 兼師堂の北より
本尊大師の像二尺余
股士不露尊

抑當社

八皇四十五代聖武天皇天平五年吉備大臣唐土より歸朝のとき
播磨國廣峯小垂跡より
崇奉より其後常住寺の十禪寺圓如上人小

神託あり

帝城守護のため貞観十一年八坂郷感神院小遷座
給り

同十八年疫神

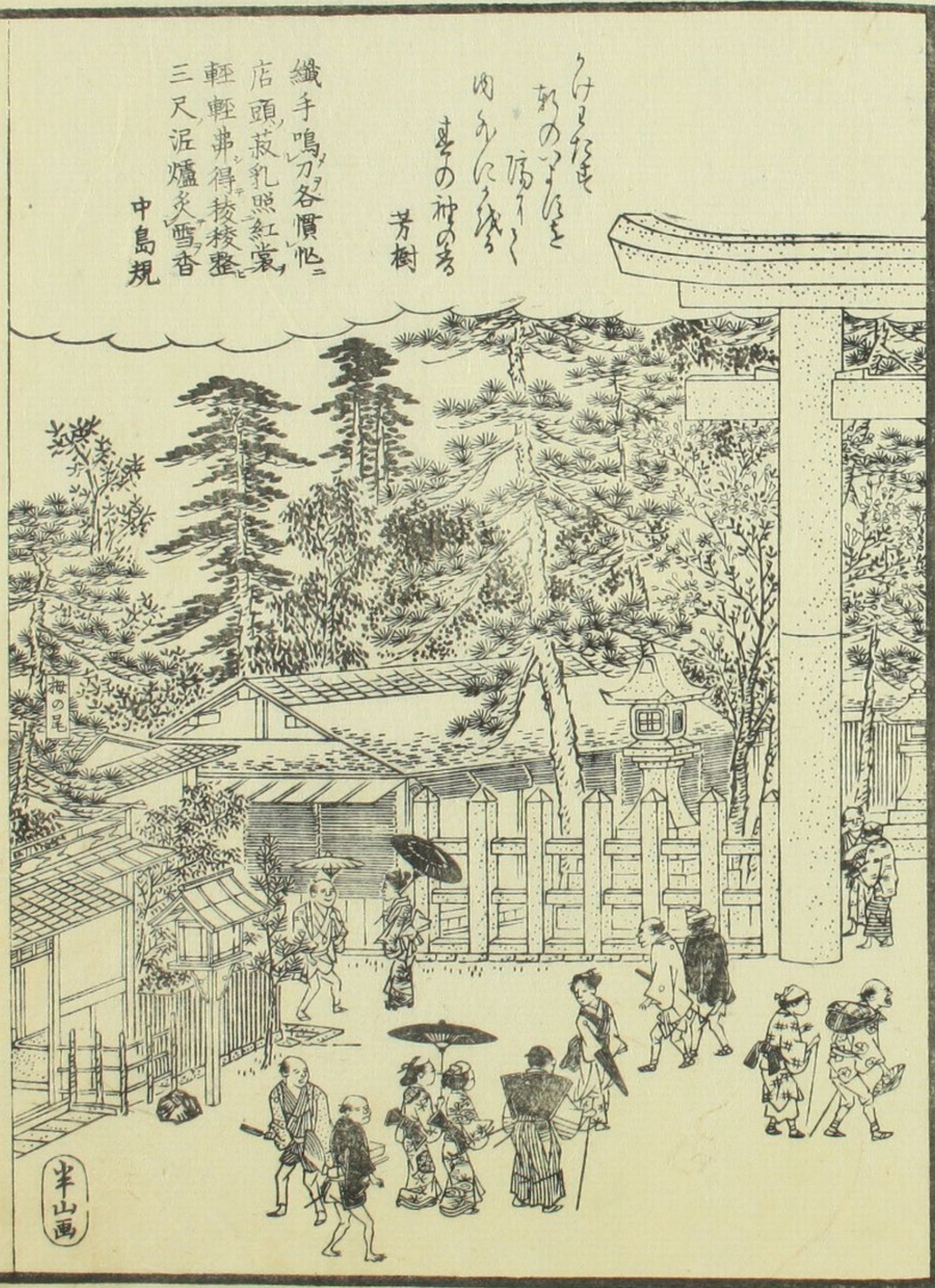
崇了をたぐり世人疾小悩む
以外より曩祖十部日良

麻呂京中

の男女を卒く六月七日十四日疫神と神泉苑小送る其次年又

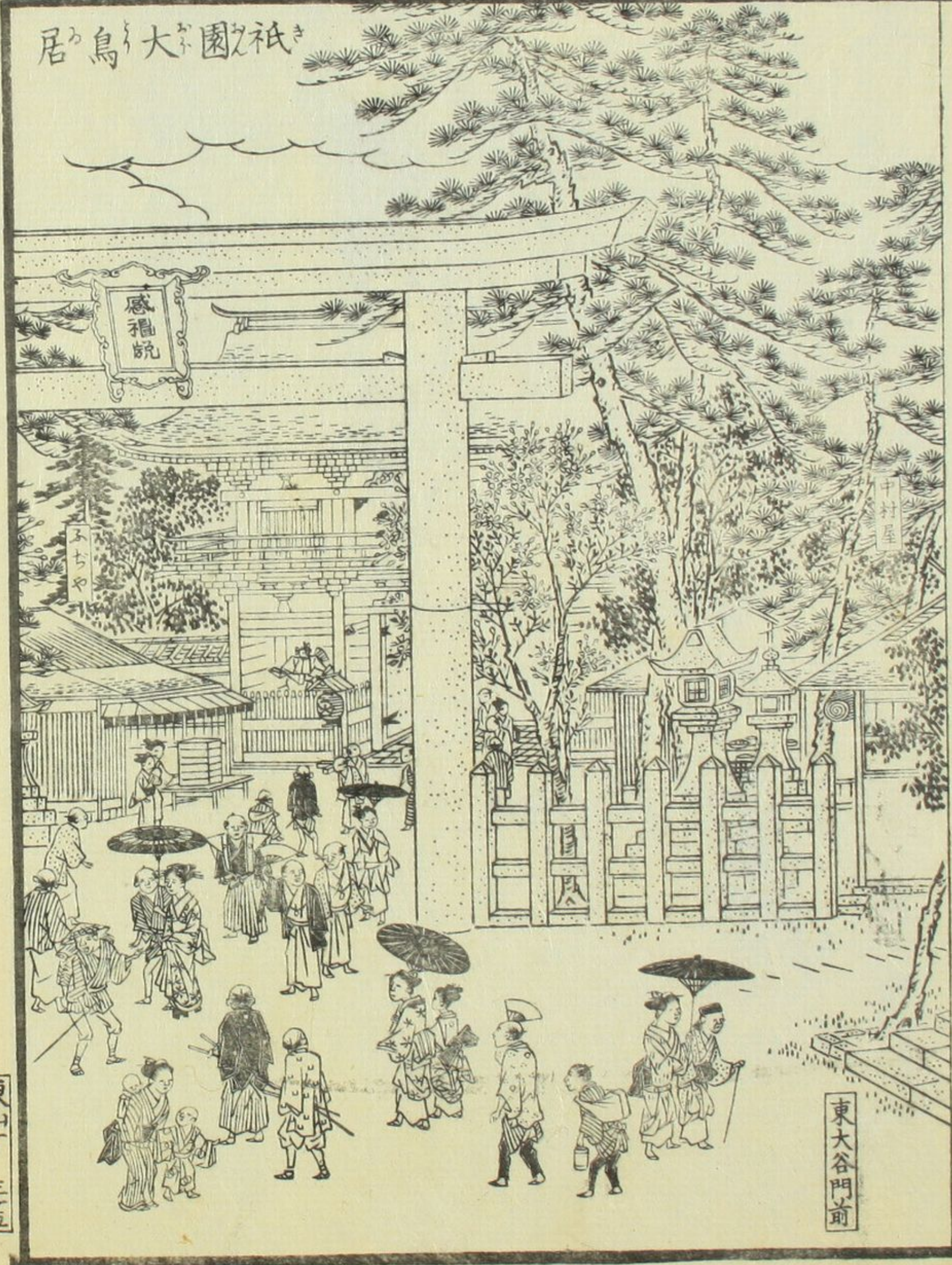
織手鳴刀各價也
 店頭菽乳照紅裳
 輕輕弗得技校整
 三尺泥爐爇雪香
 中島規

芳樹
 其の神の考
 肉をいへる
 祈のよほを
 けりてま



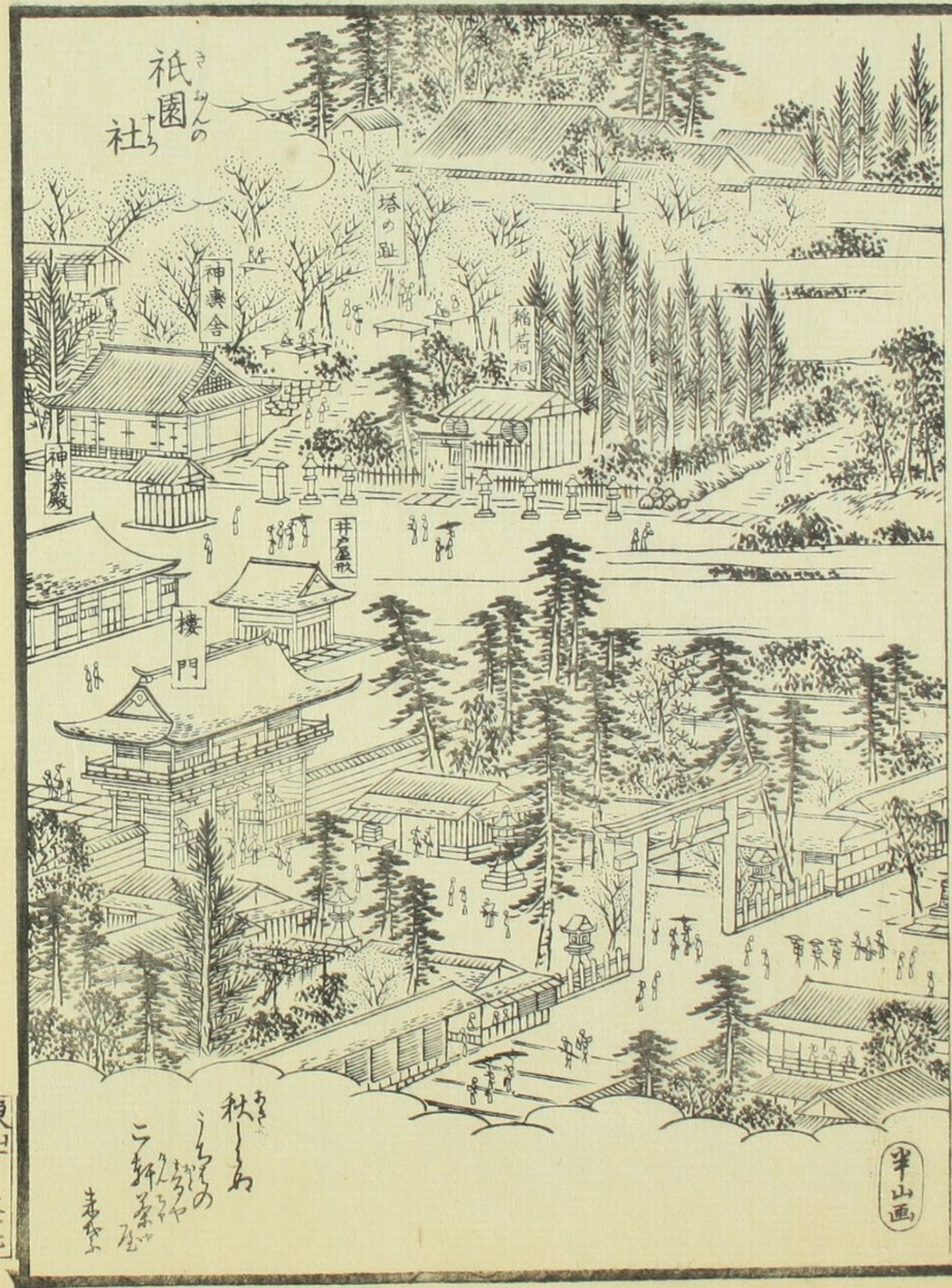
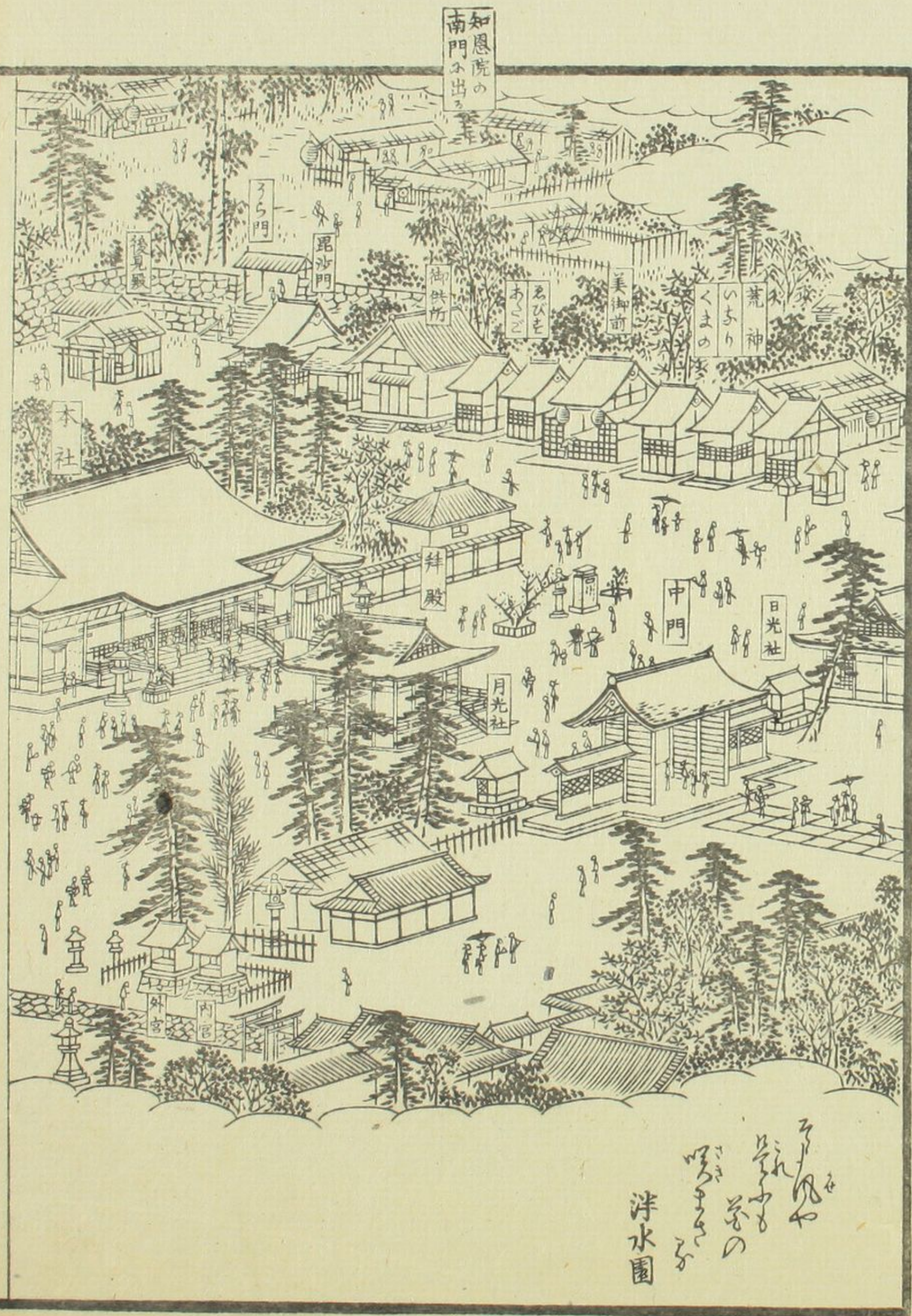
半山画

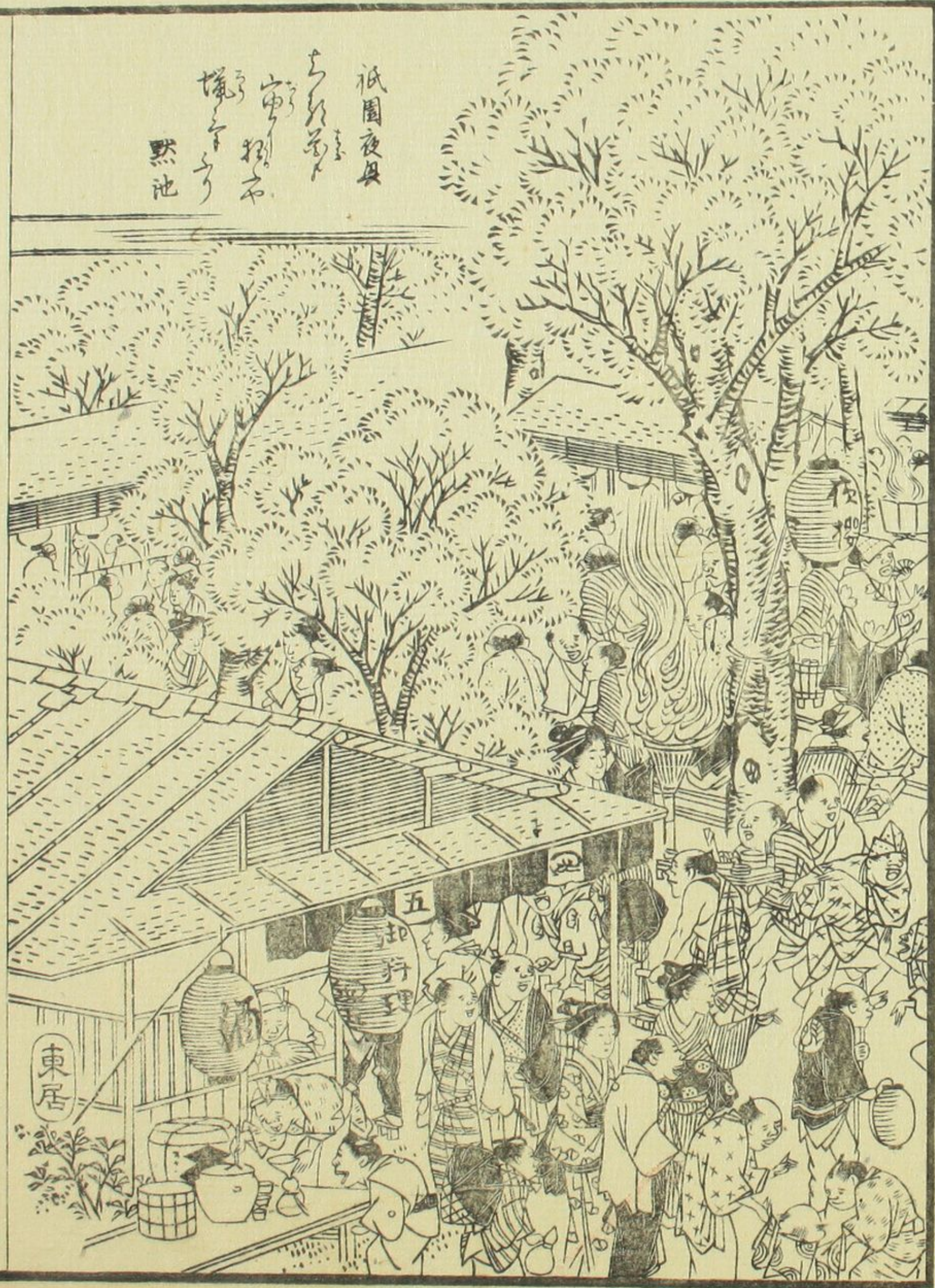
祇園大鳥居



東山ノ三五

東大谷門前





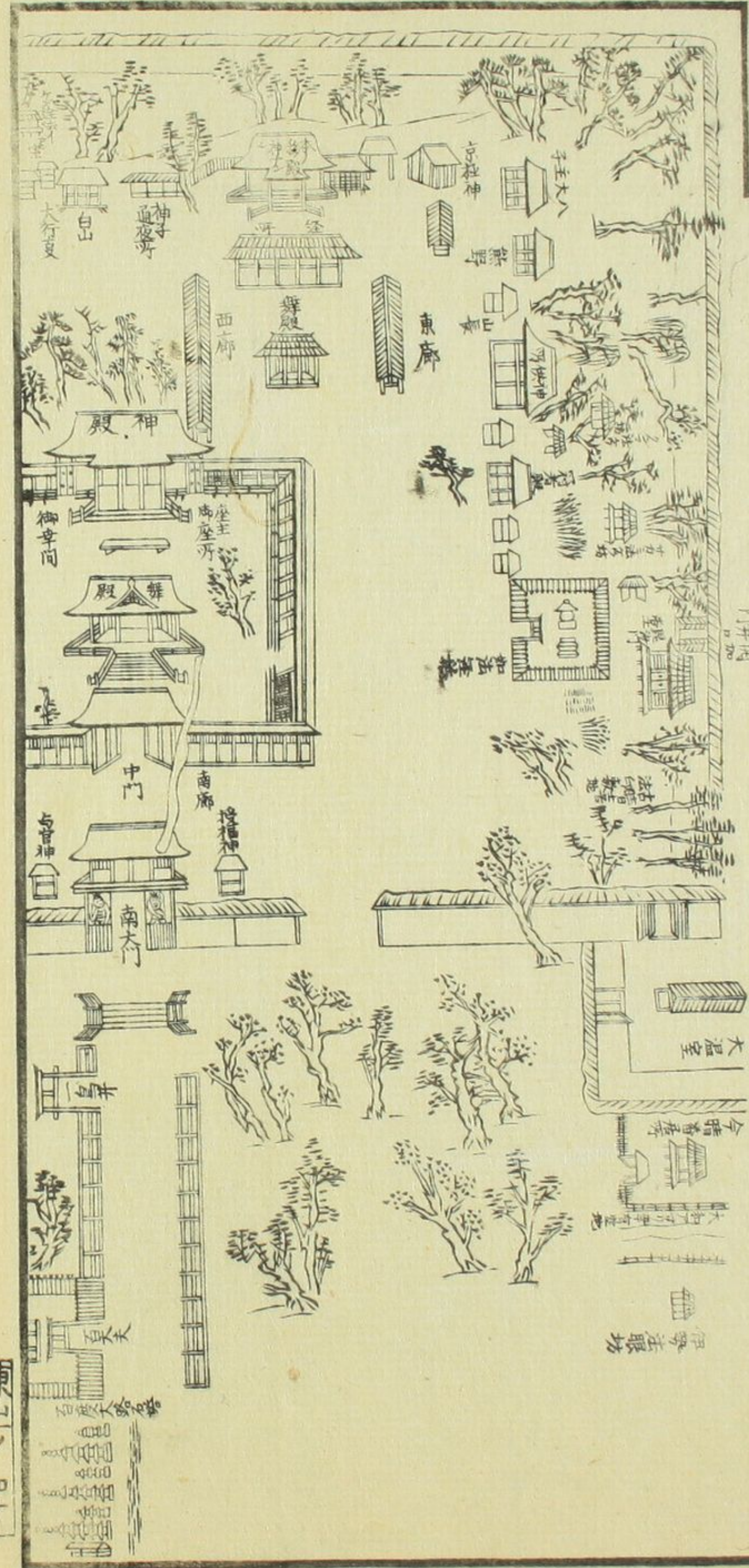
祇園夜具
 山崎
 堀
 黙池



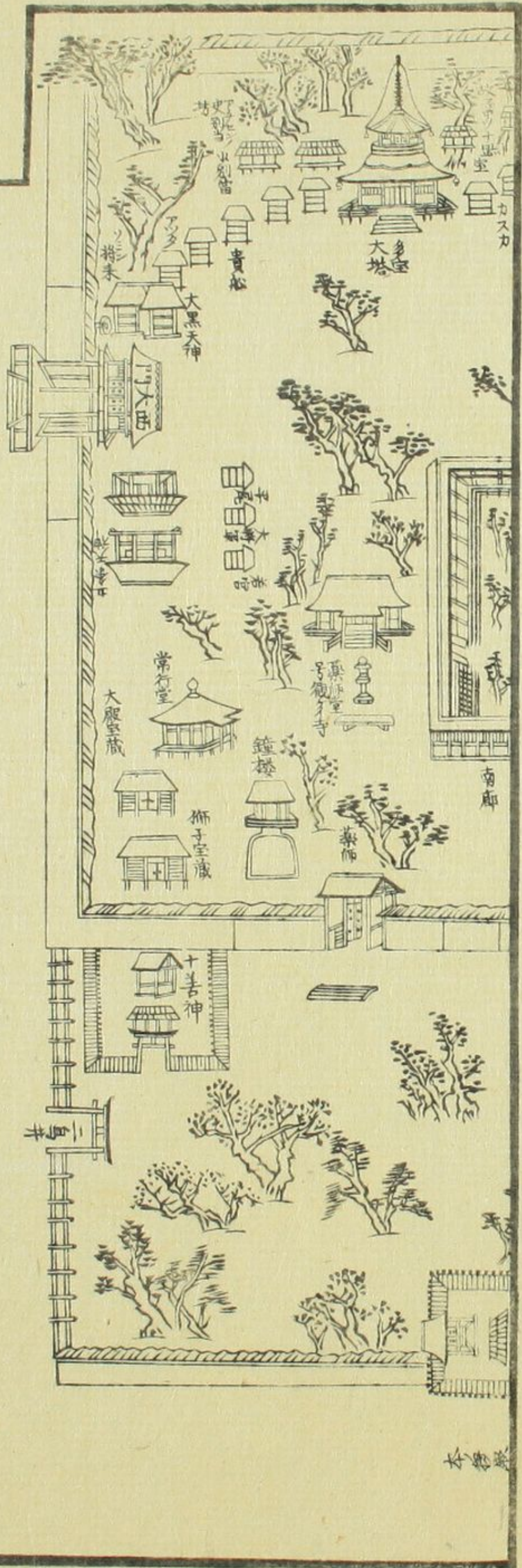
祇園林夜櫻
きんぎょのよる

高架火篝映
 萬枝一群裙
 展晚歸時醉
 餘暫倚繩床
 坐花氣煖來
 欲泌肌
 梅窩山樵

寛和年中祇園社古圖



貞方範摹



山城國愛宕郡八坂御祇園社繪圖

寛和貳年丙十月 大繪師法眼圖念 遠進

此別當法印所記也

石御表書也

正安四年 寅十月六日奉摹造

筆者 後六傳下柏幹傳

行筆三十八

右圖中凡記之ヲ縮寫ス

時ハ満水一々下流少ク宮川と号一鴨川ハ流も入が川の程ハ山崩と川を埋今ノ如ク高樓飛觀軒と云々奇舞の街也

北の地の高き亦小生葛原の有対一説小下河原の名義ハ此地の東小山科の四宮河原と云々四宮の地有原と云々意ハ四宮原なるべし彼小関より流る小川といふ河原と云々此下河原より由言傳ふも字ハ説く説く下と云々何と云々是ハ後人尚考下

其角
關更
全
道彦
梅室
梅巖

百度大路

祇園社より南下河原半王地社迄の間と云々此名古書小見たり祈願有者先本社請ふ

神幸道

大鳥居の前と西に至る通路と云々祭禮の時神輿大鳥居を出て西へ行

山王社

右神幸道の北側あり南向の社の傍三棟の像を安け俗ハ日吉社と云

此社ハ

往昔山より禁庭ハ濫訥の事ハ時ハ日吉の社の中何れの御

輿

大衆等出〜大内ハ奉是は振奉るを御輿振と云

望小達

せざれハ神輿を捨置歸山ハ其事度々及ぶ以ハ神輿と

祇園の社

小移さる〜此所ハ置奉るなり故ハ捨山王と云

平家物語

云去保安四年四月ハ神輿入洛の時座主ハ仰せ赤山社ハ奉る

又保延四年

七月ハ神輿入洛の時祇園の別當ハ仰せ祇園の社ハ奉る今度ハ

保延の例

た〜とて祇園別當權大僧都澄憲ハ仰せ秉燭ハ及ん祇園の社ハ

奉云

辨財天祠稻荷祠妙見祠ハ西樓門前南傍何と云々近來の建管成

疫伏社

祇園西樓門の外北の町西側ハ傳云疫神ハ祈願する時疫の疫病を免る

一説ハ

元山伏官ハ〜淨截貴所と祭る所と云

昔ハ

法螺と扱ハ馬の代り

瘦伏和語相似

又云此所昔文覺上人行齋平家と呪咀せし所ありと

華頂山知恩教院

祇園の東北に隣り浄土宗大本寺中々四箇の本寺の随一なり

本堂

南向圓光大師影像大師御自作座像長凡二尺二寸許厨子小安

勅額大谷寺

堅額後奈良院宸翰東照檀彌陀三尊佛立像三尺厨子に安

神愛不思議佛舍利

堂内小安置り舍利塔ハ黄金中唐物あり

阿彌陀堂

本堂の西の傍あり東向舊東の山上本尊阿彌陀佛座像長一丈餘

四天王

天界の蟠龍の画ハ海北友竹奇の筆なり

古墳無銘塔

阿彌陀堂の北より五輪の石塔波高九尺五寸地輪方三尺五寸

開山相州鎌倉極樂寺

開山相州鎌倉極樂寺恩證の墓なり元太子堂當山小あり昔ハ彼思月ハ太子堂より僧来

一説小此塔上東門院の御塔

一説小此塔上東門院の御塔なり云々上東門院ハ一條帝の中宮藤原

彰子と申撰政道長公女

保元元年十月七日薨び大谷本院小募ると云

山城巡行志云此門院の御塔正堂の西阿彌陀堂の北小有と

又或説云扶桑畧記曰上東門院と大谷小募るとは此塔なり

經藏

本堂の東傍あり西向傳大士普建普成の像と安け藏經ハ唐土福州開元寺の藏本

鐘樓

本堂の東南あり延室六年十二月十五日供養あり

茶堂

本堂の南側あり恭平専の額と掲げ棧林中書侯御筆

佛足石

茶堂の東隣あり鎮守八幡宮春日山王熊野と祭る萬善僧正の勸請なり

額

知恩教院堅額後拍原院宸翰今掲る其其往昔此所小元祖法然上人

の像と安け然る小満譽和尚の代

如く御建營あり故小上人の像と云々本堂小移り時小此所ハ勢至菩薩を

安置せんと欲せり是則上人ハ彼薩埵の化現

謂たり然ると云々意ハ叶ふ

安置せんと欲せり是則上人ハ彼薩埵の化現

謂たり然ると云々意ハ叶ふ

謂たり然ると云々意ハ叶ふ

謂たり然ると云々意ハ叶ふ

謂たり然ると云々意ハ叶ふ

謂たり然ると云々意ハ叶ふ

謂たり然ると云々意ハ叶ふ

謂たり然ると云々意ハ叶ふ

謂たり然ると云々意ハ叶ふ

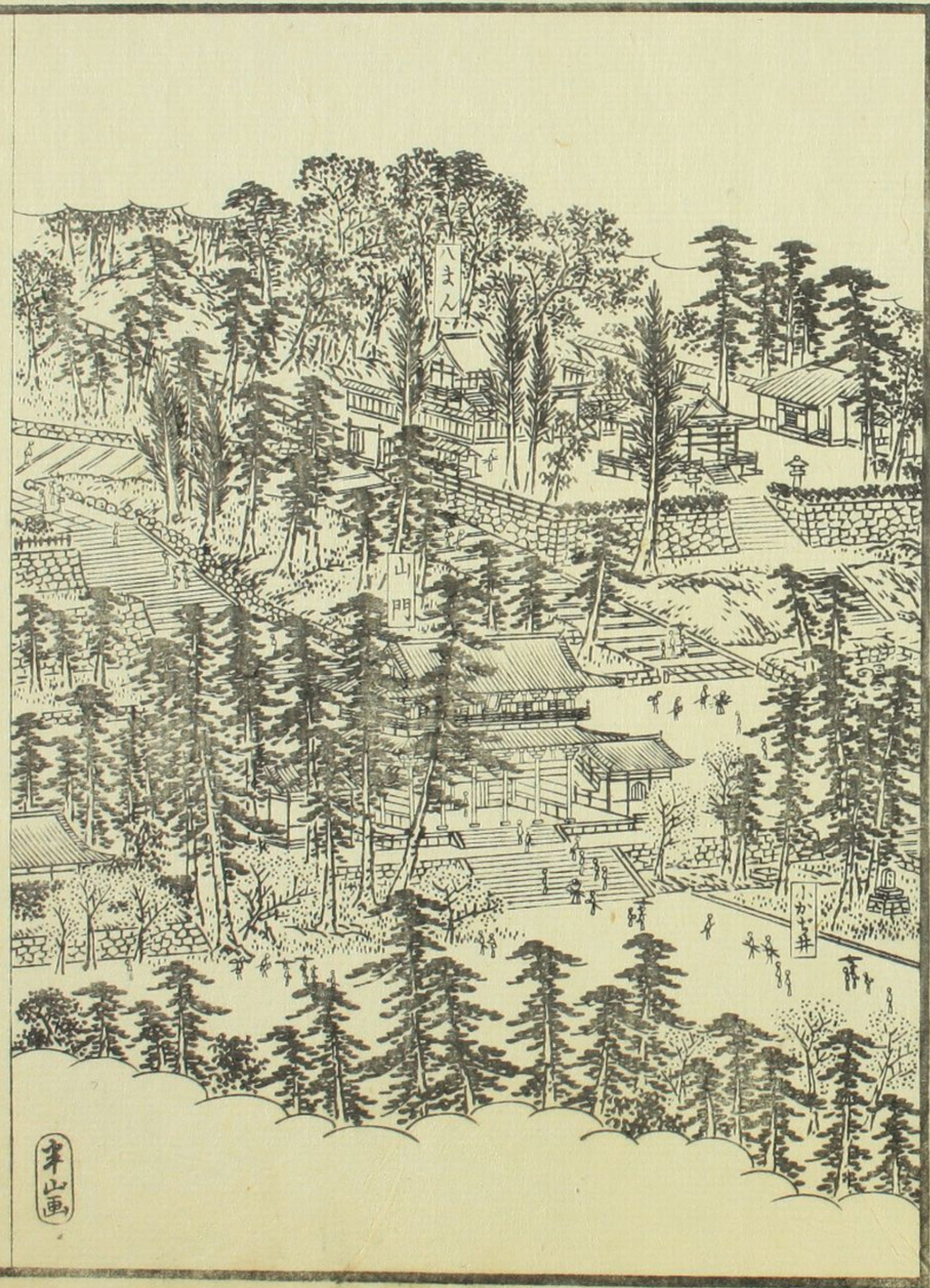
謂たり然ると云々意ハ叶ふ

謂たり然ると云々意ハ叶ふ

謂たり然ると云々意ハ叶ふ

謂たり然ると云々意ハ叶ふ

謂たり然ると云々意ハ叶ふ



半山画

知恩教院

皆山よ梅樹散株
あけく花の噴珠よ
美奈きり本堂の
廻の梅樹往昔の
城主永井信隆守大の
尚政よと梅を
糸橋渡り梅樹
名高し

大宮のつらの
梅まき
かき
神の



南門
花園門

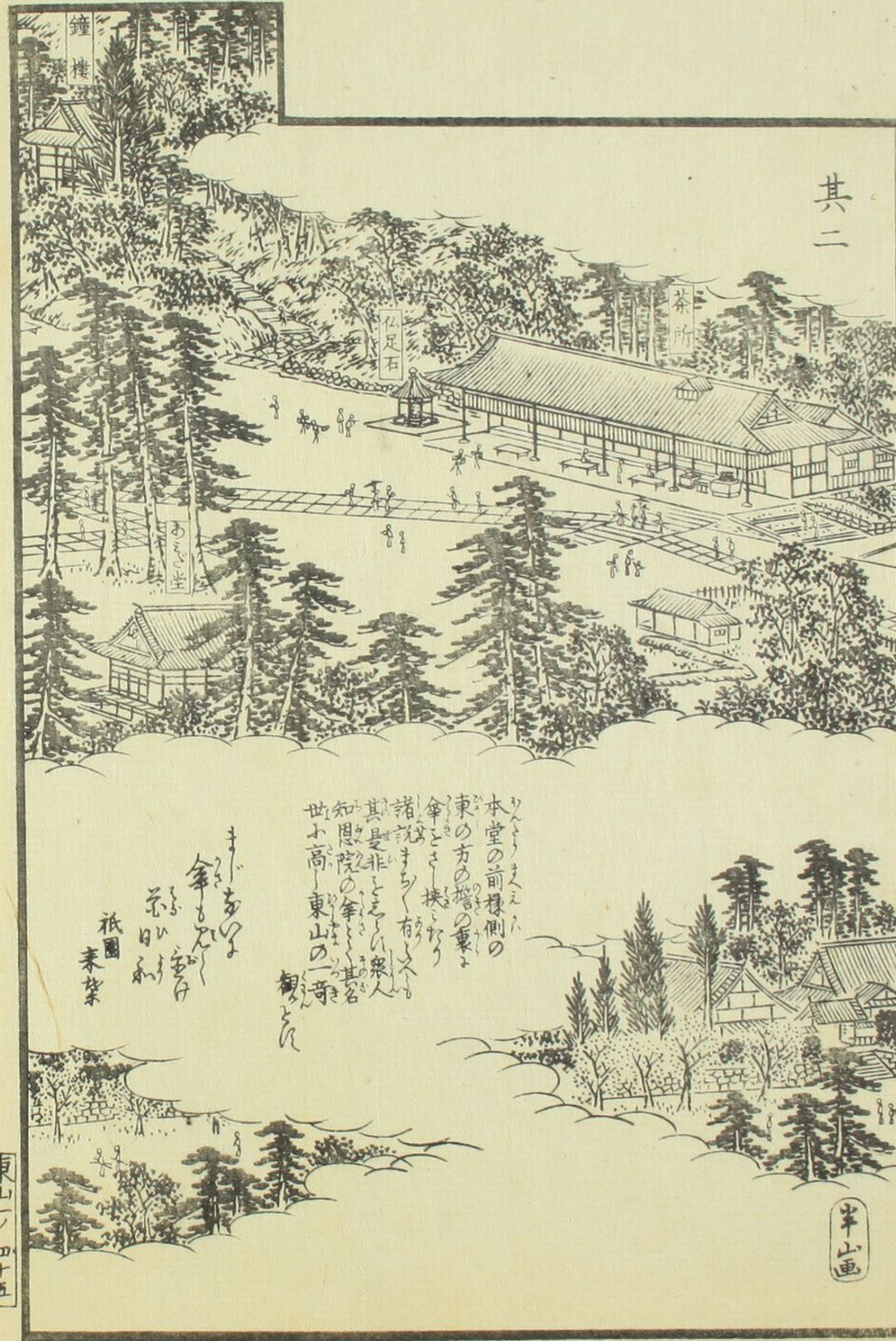
茶店

茶店

惣門

下米石

東山一四十四



其二

本堂の前縁側の
 東の方の塔の裏に
 傘をさす様子が
 諸説あり有る人
 其是非と云ふ人
 知恩院の傘をさす
 世小高、東山の一景
 観と云

東山
 傘をさす
 景
 祇園
 末葉

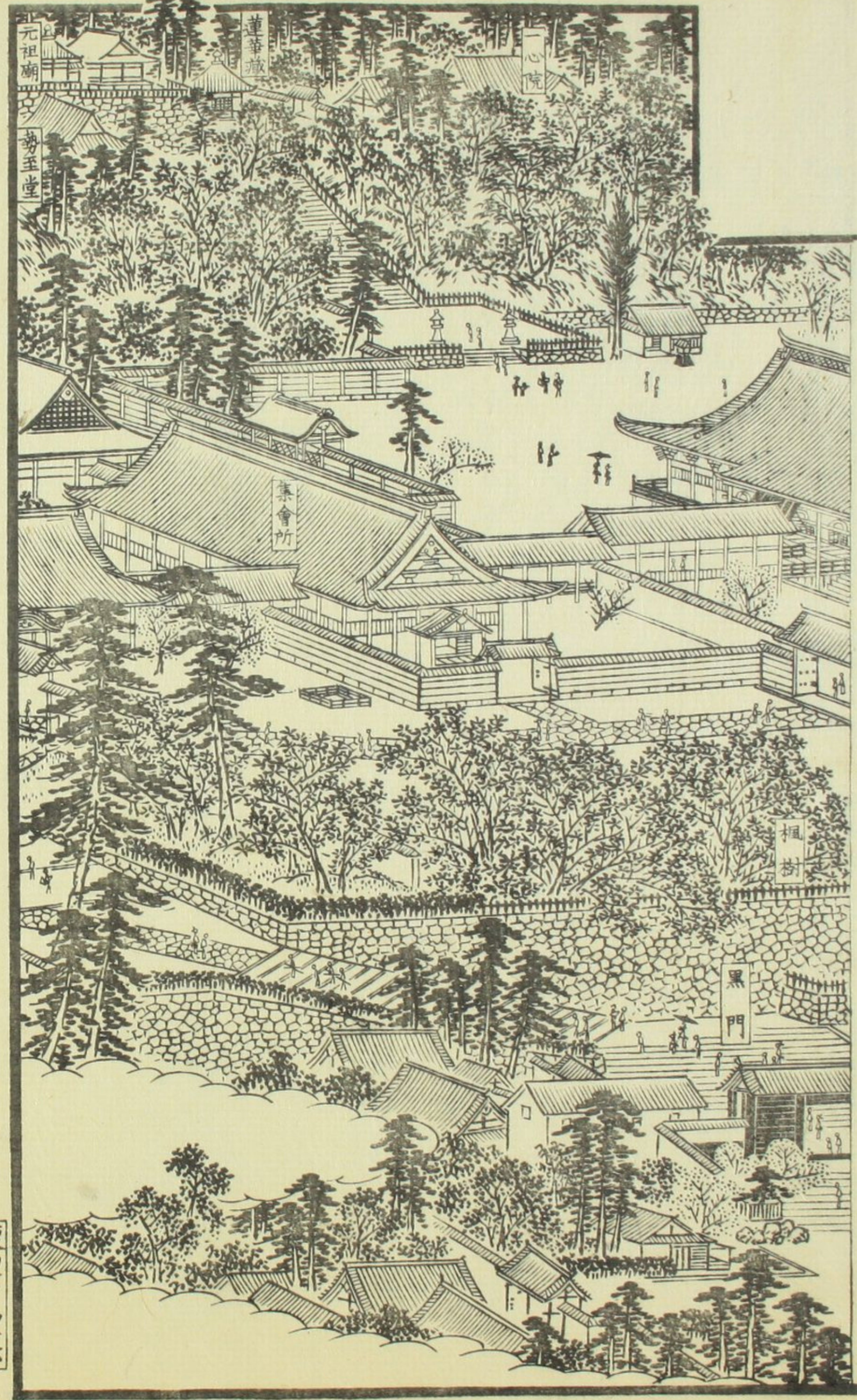
東山一四十五

半山画



一人主ふり
 くらひ全
 大竹橋
 芥舎
 吹雪
 のきき山
 ありと新
 静くはら
 さくさく
 河本
 近之

岸山画



東山ノ四十六

墓所是專修念佛事近日有山門之訶於彼墳墓興盛之故云但遺骨者門弟等偷掘出渡他所云

蓮華藏 廟堂の南あり 紫雲水 勢至堂の東傍あり大師入寂のとき

一心院 勢至堂の南あり 紫雲水 勢至堂の東傍あり大師入寂のとき

額一心院 橫額 光源院義輝公筆 傳云本寺阿彌陀佛の像は青蓮院に安置し給

大方丈 本堂の後在 佛間 阿彌陀佛の五像を安置し安阿彌陀佛の作なり

拜間 金張附松の鶴の画 上段 床の再瀑布見本太白 中段 画ハ鉄揚張果郎

下段 極彩色画工同前 梅間 金張附松の鶴の画 極彩色狩野定信の筆

裏上段 金張附松の鶴の画 極彩色狩野尚信の筆 菊間 金張附松の鶴の画 極彩色狩野尚信の筆

柳間 極彩色狩野尚信の筆 座禪石 石の上の座禪 拾ヶヶ 集會堂 本堂の後あり南向

山門 本堂の西あり西向 額 華頂山 堅額 靈元法皇宸筆 閣上小室冠の秘迦仏

櫻馬場 山門の通りより西向 祇園の神領なり延宝七年代地あり 彫り之の櫻馬場の

小銀治井 山門石壇の下より傳云三條小銀治宗近名初拜時 鐵盤石 小銀治の井の

本願寺舊跡 山門の北塔頭崇徳院の後より親鸞聖人遷化あつて鳥部山小火葬

知恩院宮御殿 黒門通北側あり 螢窟 東の山上五町ありにあり

太子堂舊跡 塔中光玄院の地なり其のまの白毫寺速成院と号し開基聖徳太子少

花園帝陵 右太子堂の旧地のつき東の山の手に知恩院方丈と粟田領の境より四丘

園太曆曰慈嚴僧正記貞和四年十一月十一日太上法皇於仁和寺菽

原仙居晏駕仙筭五十二日來御脚氣御長病也同十三日御葬禮先幸

太子堂此内々御幸儀也御輿也雲客少々供奉於十樂院上山攝山作所奉

太子堂此内々御幸儀也御輿也雲客少々供奉於十樂院上山攝山作所奉

太子堂此内々御幸儀也御輿也雲客少々供奉於十樂院上山攝山作所奉

太子堂此内々御幸儀也御輿也雲客少々供奉於十樂院上山攝山作所奉

葬之御佛事等依御遺命於彼堂被修之仍於秋原殿者無御中陰儀
或曰太子堂速成院也本在大谷十樂院青蓮院別號也十樂院上山
者今知恩院云尚薩戒記の記も是ふ鶴林崇泰院の竹林の地といふ
常在光院古跡今の経載の辺なりといふ知恩院御建立の時相國寺康苑院の内ふたは
口良恩寺地蔵尊あり是常在光院の佛像なりといふ又徳然草常在光院の釣鐘
の銘菅原在兼卿の朝世尊寺行房朝臣清書なり或云常在光院の鐘今妙心寺靈
雲院あり菟玖波集小前大納言尊氏常在光院より百散連歌侍よりか
瓜生石山門の北黒門通の道の中より往昔此石の下より一夜小瓜草生じ其蔓程を
石面小まじり花を生じ又胡瓜を生じ其瓜小半頭天王の文字ありとも
又感神院の字なりとも依見聞の人希有なりとも此石靈石なりとも代貴々
不浄と拂ひ又石上木の事と禁じ終ふ其瓜を取く栗田の天王の撰社小
納む此所りとも青蓮院の敷地なり故小今に至る彼神社小胡瓜の鉢有
る祭日之と躰じ也昔ハ祭日の前夜必は神輿と遊来り此石上より祭事行り
西の大門と閉く神輿と入り是より此義なりとも云又栗田の天王の例祭の鉢本わり行
なり其中に胡瓜の形と第一より此謂ふ也

尊光法親王塔山上小なり知恩院神門主良純法親王の後住也
天壽院殿塔山上より豊臣秀頼公の室なり
廉貞院殿塔同所小あり九條攝政道房公の室なり父ハ松平三河守忠直卿
尊智院塔同所あり智院清誉源覺光誓ハ三時智恩寺一代の住居なり近衛
當山當山葬當山初めハ東の山腹今の勢至堂の地也や大師入寂給古ハ叡山の別院南禅院と
池田輝政塔右日院あり俗稱三右衛門同夫人の塔其外酒井家牧野松浦本多と塔あり
夫當山ハ元祖圓光大師宗風開運の靈地也吉水の禪房といはれり
初めハ東の山腹今の勢至堂の地也や大師入寂給古ハ叡山の別院南禅院と
夫より星霜三つ山門十二代の座主青蓮院慈鎮和尚法然上人の満譽和尚の代ハ
弘法隨信弘法隨信弘法隨信弘法隨信弘法隨信弘法隨信弘法隨信弘法隨信弘法隨信
至つ台命を蒙つ峻岨と穿ち手垣今の如く伽藍御建營
り洛東無一宗第一の本寺といは是即前帝の詔勅の倫旨なり宗旨
摠本寺の跡以小興なり世小西流二西山義三長樂寺義四九品寺義也

是皆當山吉水の二源より出る所なり四本寺の故也毎歳の開山忌と
御忌と稱し法會とあり是又勅命小依る所論旨御教書あり二流
都鄙の僧徒出世上人踰勅許を願ふに至る當山より執奏は是又勅詔
小依り此地古より大谷と号し土地山嶽や々々谷境廣莫なればなり
故小大谷寺と号し亦今の如きは
御建管の時峻岨と平垣なり
抑元祖大師の傳記を鑑し美作國久米南條縮固の産なり父糸条押領
使漆時國母の秦氏なり子なき事と歎く夫婦諸より佛神と祈り秦氏
夢小刺刀と飲と覺く則姓身となり長兼二年四月七日午刺男子と生じ此
時紫雲空ふたふひき白旗二流降たり館の西なる掠の木小止る鈴鐸四
方小ひき紋彩日小輝き七夜を經く天小登る是より此樹と誕生掠と号く
後小佛閣を建く誕生寺と号し今にあり赤子の字と勢至と号け竹馬
小鞭と打の齡より叡智に々稍もれ西の壁小向ふの癖あり九歳や々々同
國の菩提寺の室小々學問を院主勸學とす人情小兒の量と勸ふは是九小

あはれ徒小邊鄙の塵小雜復と惜く比叡山西塔の北谷持實坊源光が許小
登り勸學が書翰小曰進上大聖文珠一體とあり時久安三年二月十三日入洛と
勸學が書と持實坊小渡り源光を披見く文珠の像と尋る小兒の
上洛せしより使者申す小早く兒の聰明なりと叡智せり則十五日小登
山源光試ふ先四教義と授る小叢とあり不審なる疑ふ所皆天台の要論
なり不思議の事に思ひなれば我淺才に々いそ此人を弟子とせんや同年四月
八日小兒と相具く功德院の阿闍梨皇圓が許小入室せし皇圓其智の勝れを
聞き驚く曰去る夜の夢小満月室小入と覺るが叔小此小逢き前兆なりと悦
喜する同年十月美髪と刺戒檀院すく大兼戒と受たり斯く惠解天然
小々四教五時の廢立かるとけ一心三觀の妙理玉液磨所立の義師の教小
超たり阿闍梨感く曰學道とははる大業とけ天台の棟梁とめと寄々
勸めなれば是も又名利の學業なりと忽師席と辭く久安六年九月十二日
十八歳や々西塔黒谷の慈眼房叡空のものと行我幼稚より隱遁の志願深

う演らぬまゝ女年せむねいゝ出離しゅりの心こころと起おこは事こと是これ法然ほつぜん道理だうりの聖せいなりと感かん
法然ほつぜん房ぼうなり實名じつなと源光げんこうの源げんと叡空えいくうの空くうと摘とく源空げんくうと踊おどける
黒谷くろや小塾居せうじゆとて出要しゅつやうと求もとむ此心こころ節せつをいふ何なにの道みちより生死しんじを離はなる
をきと山門さんもんの經坊きやうぼう小入せうに一切いっせつ經きやうと披見ひけんせりと五遍ごへんなりされ諸しよの經論きやうろん小就せうじゆく
情思じやうし惟ただせり小彼せうたかこ此こ高たか遂つひ小惠心えいしんの往生じやうしやう要集やうしゆ并へい善導ぜんたう大師だいしの釋義しやくぎ
を以もつ指南しゆんぱんとせり彼釋たの乱相らんさうの凡夫ぼんぷ稱名しやうめいの行ぎやう小入せうに順次じゆんじ小淨土じゆんじゆ生しやう
べき音おんを判はんせり藏經ざうきやう披見ひけんの度た是これと窺うかがふ事こと三遍さんへんなり遂つひ小其釋義しやくぎ小一心いしん
專念せんねん弥陀みだ名号なごう行住ぎやうじゆ座臥ざふ不同ふたう時節じせつ久近きうじん念々ねんねん不捨ふせつ者しや是これ名正定なせいぢやう之業しよ順彼じゆんた
佛願ぶつげん故ゆゑの文ぶん々々至いたる未世みせの凡夫ぼんぷ弥陀みだの名号なごう以もつ念ねんせ彼佛たの願げん小乘じやうじやうして
慥た小淨土じゆんじゆ往生じやうしやうを得えるこり小伏せうふく一いつ美安みあん五年ごねんの春はる四十三しじゆ歳さいなり餘行じよぎやう捨す捨す專せん
修念しゆねん佛ぶつ小歸入きにせり斯しか弘教くわうきやうの爲ため小叡山えいざんの西塔さいたうと下くだる洛らくの西山しやんざん廣谷くわうこ小至せうして
住じゆ一いつ雨う後ご此大谷こゝ吉水きちみづの地ち小来きて專せんら宗風しゆふうと弘くわめふ
上人此地小止の時三坊あり
一吉水西舊坊本主あり假住
其地圓山の西あり二吉水中之坊三西山廣谷の庵室と移り冷の經藏の地なりと云三吉水東新坊
今小方丈の地なり傳書小大谷の草庵小住く選擇集と撰むといふ坊所なり

はの程ほど小上人じやうじんの宗風しゆふう普ふく海内かいなん小弘くわまり増々盛さかちるや山門さんもんの惡徒あくとなり後
破やぶせんと或ある大原おほはらや問答もんたうありなり皆念佛けねんぶつの理り小伏ふくせり建久けんきう二年にねんの春はるに
後鳥羽ごう院いんの逆鱗ぎやくりん小入せうに四國しよこく小左遷させんせりなり美元みげん元年げんねん十二月じふにげつ小勅許ちやくきよと
蒙まうて歸京ききやうなり又また此大谷こゝ小閑栖かんせりなり建曆けんりやく二年にねん正月しげつ廿五日にじふごにち午うまの刻くわく法壽ほつじゆ八十はちじゆ才さい
小遷化せんげありせり是これより例歳れいさい正月しげつ十九日じゆじゆにちより一七箇日いつしちかんにちの間のま大法會だうほふかいあり
勅命ちやくめい小入せうに御忌ごぎと称なづけ音楽おんがくの妙たえなる聲こゑに聖衆せいしゆ來迎らいげうの思しひををて蘭奢らんせやの
薰かほり布金ふきん小満まんて法筵ほふぜんの中のちゆう小知恩院ちえんいん宮法親王みやうほふしん御燒香ごせうかうあり寺務ていぶの大僧正だうしやうぢやう
伏ふくせり末流まつりゆうの衆僧しゆしやう大會だうかいの座列ざれつと正ただ敬けい礼らい渴仰かつげうの分野ぶんげん去き不遠ふとんの極樂淨ごくらくじやう
土是どし比皆ひけ大師だいしの厚德とくとく顯然けんぜんなり謂いたりなり上人じやうじんの始末しやうまつ傳記でんき當山たうざん小ありなり伏見院ふくけんいん後伏見院ごふくけんいん
撰採集の講演を御聴聞ありて感感のゆゑ山門功徳院舜昌法師小勅上人行狀の同記を
撰述し西上皇後三條院の宸筆又尊圓法親王并小廿尊寺の良筆小書りしなり全編
四十八卷画圖ハ土佐吉光也
今尚宝庫小藏せり

法親王門跡當寺御法務の事ハ東照神君の上奏とうしやうしんきんじやうそうなり良純法親王りやうじゆんほふしんの
權けん壘らいなり又當山たうざん廿五代にじふごだい超譽しやうぎよ上人じやうじん三河國さんかこくの産うち徳川親忠君とくせんしんちゆうきんの七男しちなん也

其初信光明寺住、後小當山小轉住、天文十八年八十一歳中、遷化あり、今茲小安政四巳年閏五月十日國師瑞宣下高顯真宗國師と謚、
 東梅宮 智院石橋の地あり、其辺を梅宮町と傳云、所祭城西の梅宮流の神なり、故小東の梅宮と号し、今大小廢れ
 明智光秀首塚 梅の宮の傍あり、原黒谷道の東三町あり、光秀の頭を以て、小泉せられ、近世地小あり
 惟任日向守光秀、清和源氏土岐六郎伯耆守頼清の後胤中、美濃國主土岐大膳大夫頼藝の姉の子なり、濃州明智の里小住に、故小明智と号し、織田信長公小仕へ、近州志賀郡坂本の城に居住し、天正三年丹波國と領し、龜山小在城せり、天正十年まゝ十七年の間、信長公仕へ、勇忠の臣なり、天正十年六月二日叛逆し、信長公父子と弑害し、及び、同十三日山崎の合戦、敗れ、江州坂本に落ゆ、途中小栗栖村に、土民の爲、小室長政、遂小頭と獄門小泉せり、然るも恩顧の者有、以頭と竊小盜と葬り、ものゝへ、行年五十五歳、愚因縁と、嗚呼惜しき事也、法号明窓玄智居士、辞世云、
 逆順無二門 大道徹心源 五十五年夢 覺來歸一元

金藏寺

右同所の北の方東側、門前條あり、青蓮院御門跡の院内、俗小栗田の庚申とし、三椽堂あり、故なり、御蔭堂と云

本尊 地藏菩薩

長三尺許、立像、南向、作詳なり、傳教大師の作、或ハ傳教唐土常小此像と信せり、久一菩薩と感應あり、糧なり、時ハ菩薩米袋と持來り、夢と云、現と云、與へ給つり、故小米地藏と名づる

日吉社

地藏堂小隣、山王権現と祀、朝日天満宮、菅神と祀、地藏堂の妙見堂の西小、南向、傳教大師曾て天台の不見不聞、三諦と表し、三の椽の形と作る、其ハ兩手と以て、兩眼と掩し、其ハ兩指と以て、兩耳と塞く、其ハ兩手と以て、口と閉し、俗小見ざる聞ざる言ざる不と様と傳語相同し、且様と申と字義相同し、故小庚申の日、赤詣多し、此三椽の如く、慎まらば生涯あり、事なりと云

三椽堂

妙見堂の西小、南向、傳教大師曾て天台の不見不聞、三諦と表し、三の椽の形と作る、其ハ兩手と以て、兩眼と掩し、其ハ兩指と以て、兩耳と塞く、其ハ兩手と以て、口と閉し、俗小見ざる聞ざる言ざる不と様と傳語相同し、且様と申と字義相同し、故小庚申の日、赤詣多し、此三椽の如く、慎まらば生涯あり、事なりと云

虚空藏堂

三椽堂の西、三椽堂の西傍あり、東向、座像二尺許、傳教大師作、傳云、此三椽堂の西傍あり、東向、座像二尺許、傳教大師作、傳云、此

蛭子社

三椽堂の西傍あり、東の方三條通人家の傍小、此像と云、此三椽堂の西傍あり、東の方三條通人家の傍小、此像と云、此

尊勝院

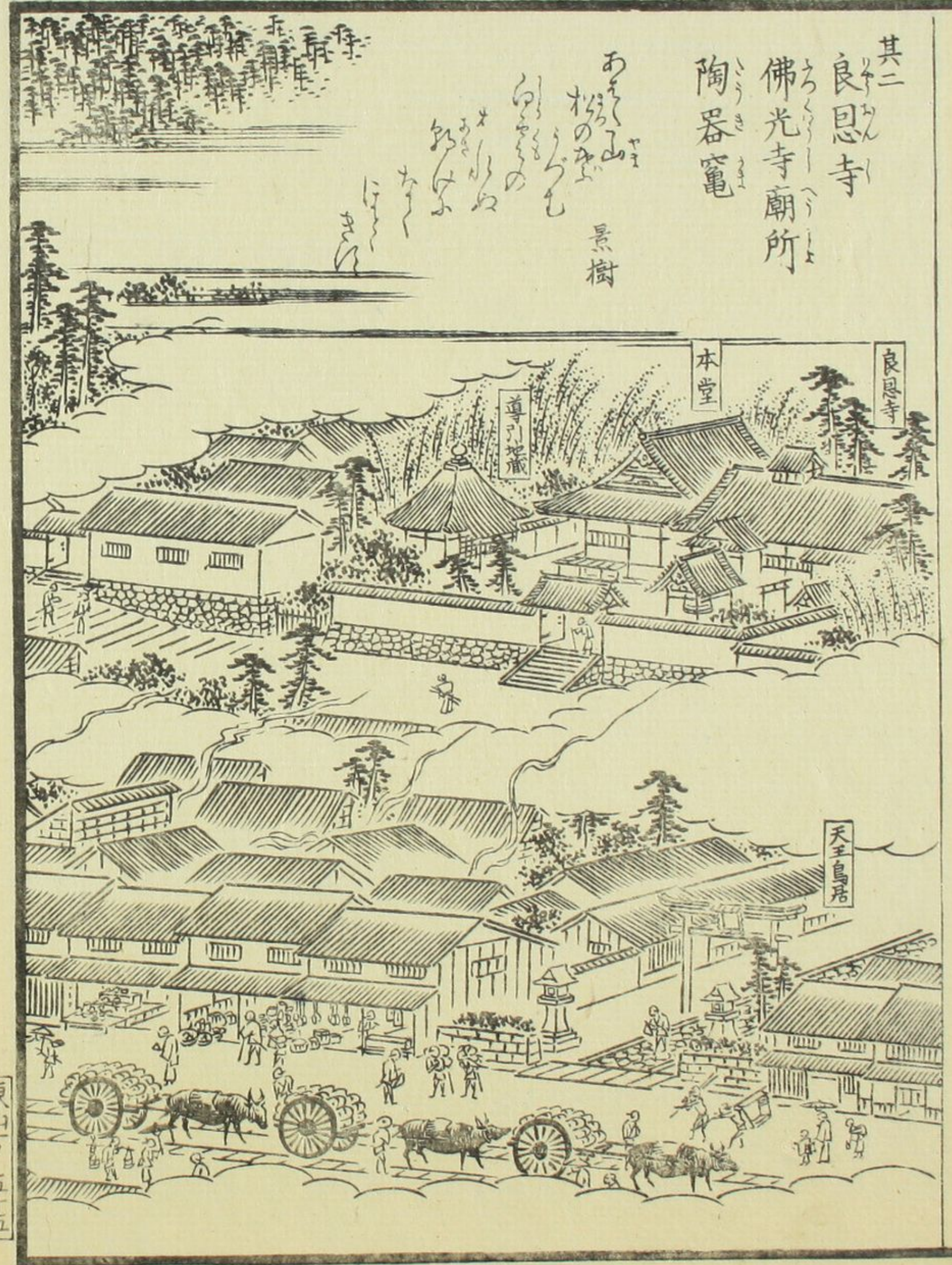
御蔭堂の南の丘に、青蓮院御門跡の院内也、天台宗、山門尊勝院の別院なり、住職ハ代々日野家の猶子たり、又江州多賀の社僧と兼ね、彼地小、不動院と称し

本堂

南向、元三大師、座像二尺餘、自作、多賀社、大師堂の傍あり、東向、江州多賀大明神と祭る

白川橋

三條の東、白川の流小、廣大の石橋なり、白川の水源ハ江州志賀郡山中村の溪より出、白川村に至り、白河と云、鹿谷の西と怪、南禪寺小、此所ハ流色大和橋小、新十載、白河のたえぬを、代はる友子も、法親王覺如



金剛寺 白川橋の東栗田口の北側あり一切経山と号し浄土宗往古金剛勝院の古趾なり

青蓮院殿 栗田御領の御門跡 天台山門の座主法親王の御所也始祖傳教大師あり

中興の大僧正行玄和尚より 以人大織冠十三世の嫡孫京極其政師實公の息男より山門

栗田口 東国より花洛の路口よりゆをふ口と称し和名抄ふ上栗田郷下栗田郷と有共小愛石

名産栗田焼 三條通栗田口の左右小陶器軒とて種々無量小器物を製し店ふなり

華頂山植髮堂 三條通栗田御殿門筋の北あり親賢聖人植髮の像と安け舊青蓮院御門跡

本尊阿弥陀佛 右股檀植髮尊像 立像長三尺小姿の直衣薄衣の御衣

佛和讃御文章等と勒行あり抑以植髮の尊像ハ人皇八代高倉院の

御宇承安三年小聖人誕生給い御父大織冠鎌子大臣の苗裔藤原有

範御と申御母ハ八幡太郎義家嫡子對馬守義親の息女なり聖人幼

年より出離遁世の志願し九歳の春青蓮院慈鎮和尚の許

無動寺に登り天台止觀を明らゆ遂に難行を捨く易行小趣き本願念仏

の一流と弘通給ふ慈鎮和尚聖人の剃髮給ふ御貌とて一安置と

俗偈作日小ま〜〜〜蟹昌の靈地とてありみ々

栗田天王社 青蓮院の東の五小あり鳥居ハ三條通の南側あり感神院新宮の額と掲例祭

本社西向 祭神八王子 或云牛頭天王按ずる小松園東の間小祭る所ハ王子や〜三男也

拜殿日 鎮守間王社 拜殿の西の傍あり北向 不動堂 本社傍あり南向中央不動

觀音堂 聖天堂隣り 神輿庫 石階下東の傍あり 御旅所 鳥居の傍あり

鳥居 北向三條通南傍あり石柱額置額 石燈爐 鳥居の左右あり正面勒云

感神院新宮青蓮院尊法親王筆 長明燈 龍公美の筆

首藤刑部俊通墓

刑部俊通、悪源大義平の
勇臣十七騎の其一なり

本朝武將小傳云

平治之役、義平入洛會

義朝與平氏相戰、重盛

平五百騎入待賢門

義平、以十七騎

擊走之、重盛再

督、銳士五百騎

進來、義平又以

十七騎、再戰

破之、重盛殆

危、僅免云



東山一ノ五十八

半山画

首藤刑部俊通塚

三條通栗田口東分木町民家の東山の崖あり
長四尺許の石碑と建る

石面二勅云

白川東、南、佳、誠、鬱、鬱

唐、晉、赫、公、義、居、此、室

同裏云

享保四年歲次己亥秋七月二十三日

世孫長洲山内總殿藤原廣道建

七歳より出家し、佛學に達し、且佛国の天文曆象の義に精練し、林曆の道と開闢を
天保五年九月四日寂し、年八十一、妻あり、銘文を見んたり

按、首藤刑部俊通、源氏の勇臣なり、悪源大義平十七騎の隨一なり、平治元年二月待賢
門、六波羅の軍に對戦し、終つ三條河原の辺に戦ひ、然れ、恩顧の良善なり、以、其、散、を、幸、を、ん、乎、

平治物語、平治元年十二月二十七日、上畧、續、兵、小、兵、衛、後、藤、兵、衛、佐、々、木、源、三、

波、多、野、次、郎、三、浦、荒、次、郎、須、藤、刑、部、長、井、齊、藤、別、當、岡、部、六、弥、太、猪、俣、小、

平、六、熊、谷、次、郎、平、山、武、者、所、金、子、十、郎、足、立、右、馬、允、上、絶、介、八、郎、関、次、郎、片、所、

小、太、夫、已、上、十、七、騎、を、雙、々、馳、向、小、中、畧、義、朝、六、波、羅、の、合、戦、小、打、負、既、小、

落、給、し、見、を、を、平、家、の、人、々、追、懸、責、を、三、條、河、原、中、鎌、田、兵、衛、申、々、

頭、殿、思、召、首、は、く、落、を、給、を、能、防、矢、は、れ、云、を、平、賀、四、郎、義、宣、引、返、

散、々、小、戦、を、な、れ、義、朝、返、見、給、哀、源、氏、鞭、さ、追、も、愚、か、る、者、い、な、き、物、哉、

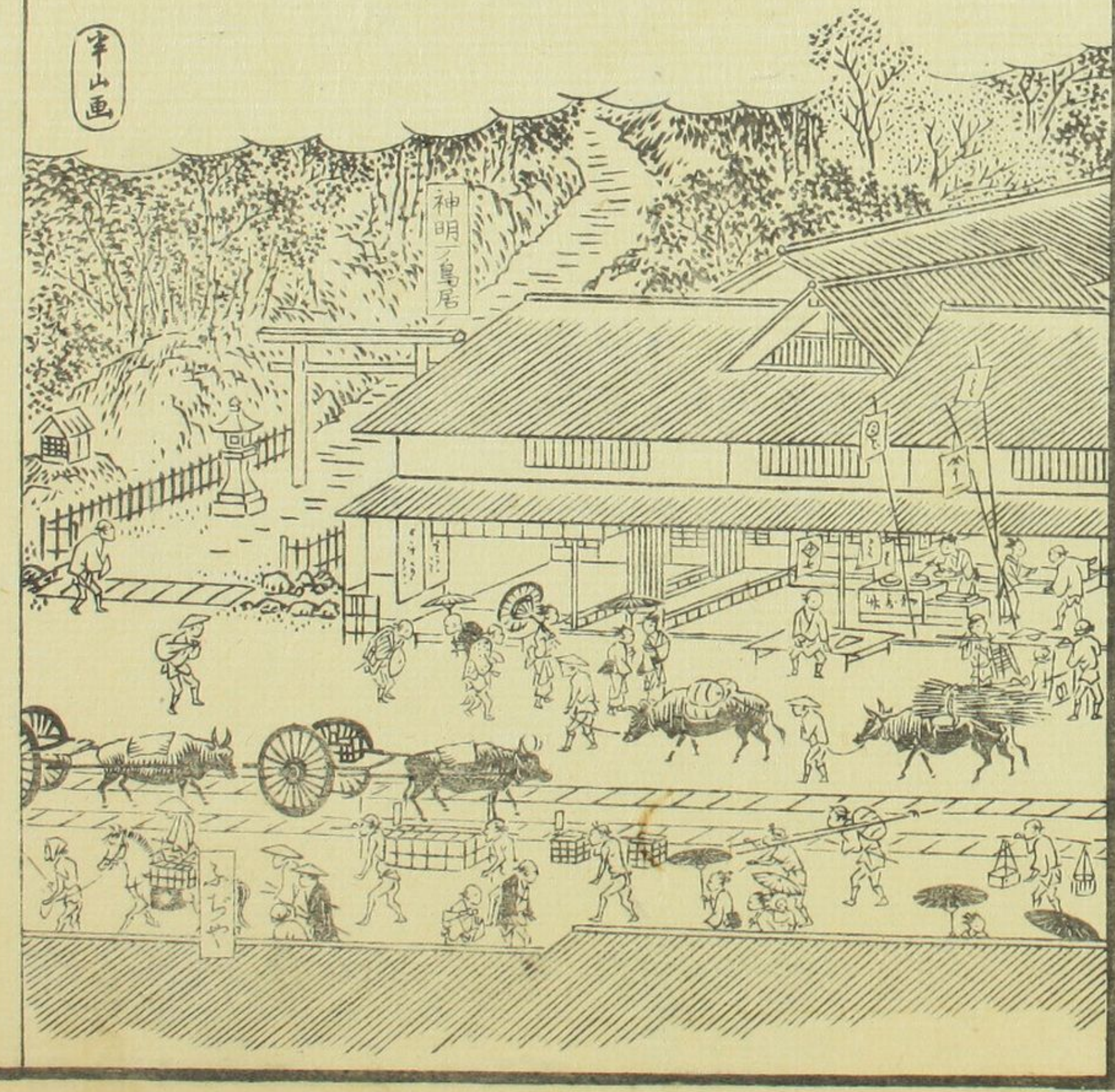
同弓屋亭池

牛蹄車跡
路泥深
繁戟東西
各作林
獨酌悠然
閑來往
馬周今日
已灰心
頼山陽



弓を左側ふあつ
諸産所小休の奉庫
さらば小上下の堪ひの百
こゝろく備へるの俵おま
二流の深布をまつい流ま
長大の短とすししの華本
恥み小満其美較つて
古の杖街りさや
奴を屋より格差を送りま
陸はひきの難と語り
今に至る夜に流る油椀の
花宮其松ひをさるる備
太平の寺恩澤とすべ

半山画



日山神明宮 栗田大路の傍に鳥居あり日向の社一ノ朝日宮とも号し鎮座の地を惠比須

内宮 東向 天照皇大神宮 山の半腹にあり 別宮 内宮の末社 南傍に五座北傍に三座

蛭子社 南傍にあり 八股杉 蛭子社の前より大木の影向石 神杉の傍にあり

外宮 東向 豊受皇大神宮 内宮の前細流の 別宮 外宮の南傍に 末社 南傍に三座北傍に

宇治橋 外宮の後の流に渡り 神水 宇治橋の北の傍にあり 神馬舎 神水の向にあり

拜殿 外宮の 鳥居 石階の上より日向宮の額と云 岩窟 内宮の南の山上にあり

三代實録曰 清和天皇菅原船津小詔 大神宮と栗田山小勸請

則是社也 雍州府志 爾後元亨建武の兵乱に災火に罹り悉く鳥有と成

或云應仁の乱に焼亡せり又建武の頃當社の宮司官軍 許多の星霜を經り所小

慶長十九年九月朔日 或云寛永 勢州山田の住人野呂九衛門尉宗光此

山下に蟄し一旦神託を得て之を再興は是に依り野呂氏代社司と

勤む相傳ふ此所を日山と号し故に麓を日圍といふ也とぞ

康富記云寶徳三年九月廿九日 甲子 栗田口神明有湯立未詳拜見了

東岩倉山 神明宮の上より坂河に往昔王城の四方の山は大乗經を藏し帝土の鎮護と

郡小なり西に訓郡あり南に松原通敷屋町の角あり石不動古跡なりと云ふ

一説に豊臣秀吉公此東岩倉の山上に樓を營し是より洛陽を眺望し

給ふと實に此處を洛中唯一望小あり絶景の勝地なり

東岩藏寺真性院 右同所あり 勢 堂塔を有り 應仁の乱に

觀音堂 山の半腹にあり十一面尊と安 大日堂 山の絶頂にあり大日如来と安置

稻荷叢祠 大日堂の前巨巖あり 藥師堂跡 同下壇平城の地あり

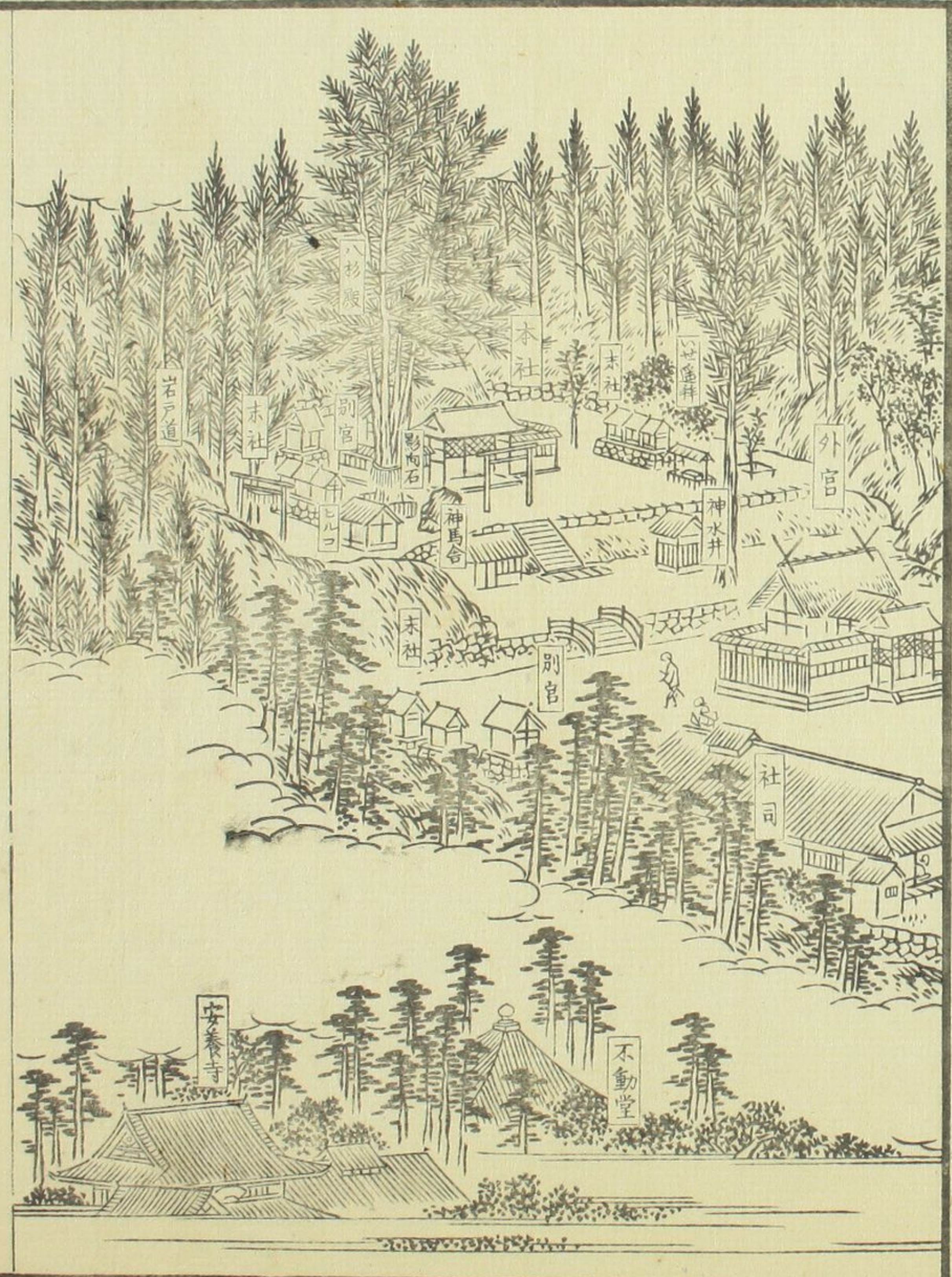
行基座禪石 同所あり 不動瀧 同所の下にあり瀧の傍に不動堂あり毎年六月廿八日

當山上に大日堂ありと云ふ世に大日山と稱し 安井御門跡の山嶺より花洛

一圓小眺望絶景と云ふ殊に山中に櫻紅葉多く岩根の躡躅

竹筒破子など開き松毬を林に葎を焼酒を造り杯をめぐり

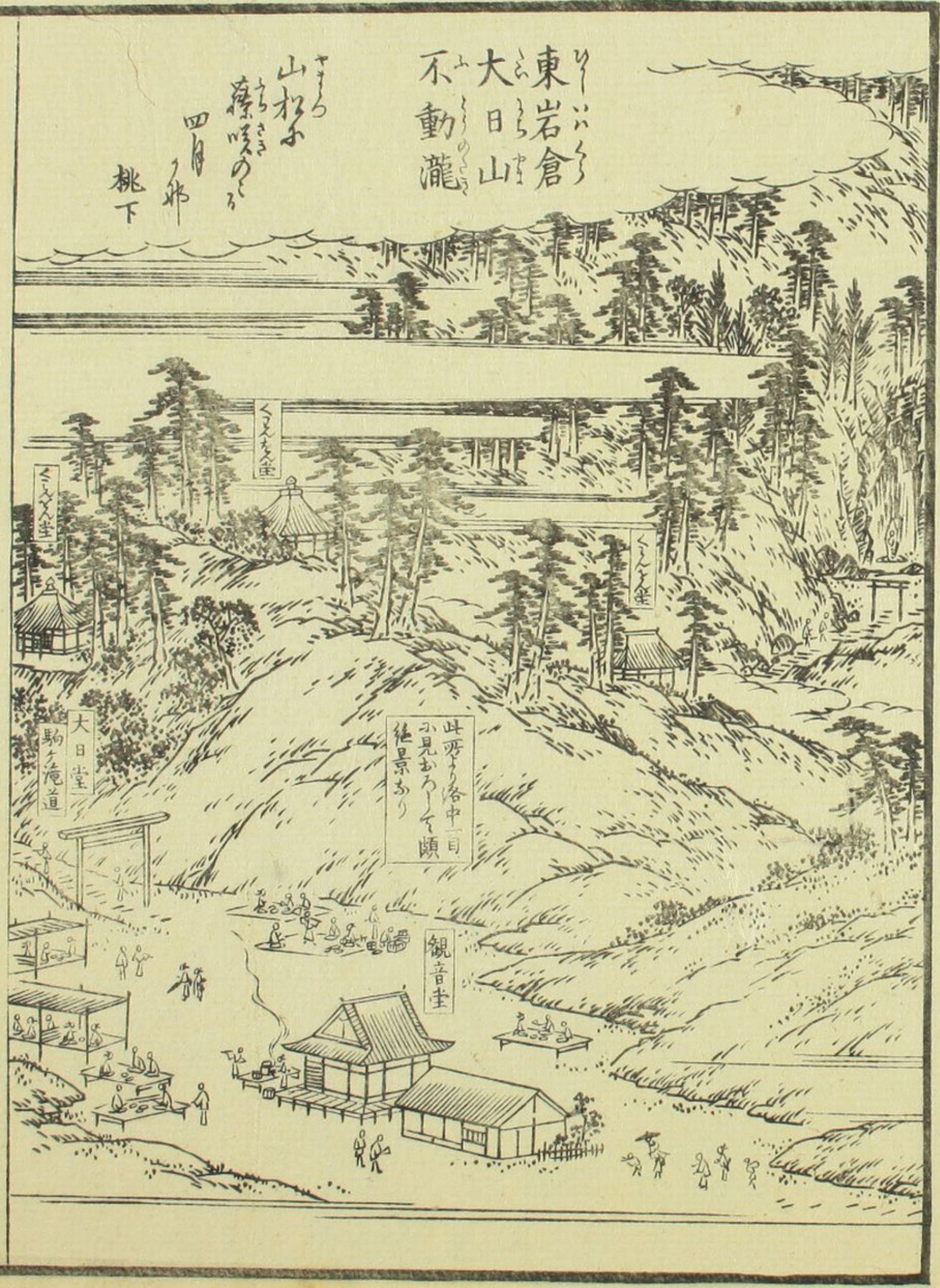
を忘るも最多なり且近來山中に三十三所の觀音の小堂を彼以て建立し



ひのやまの神明宮
日山神明宮

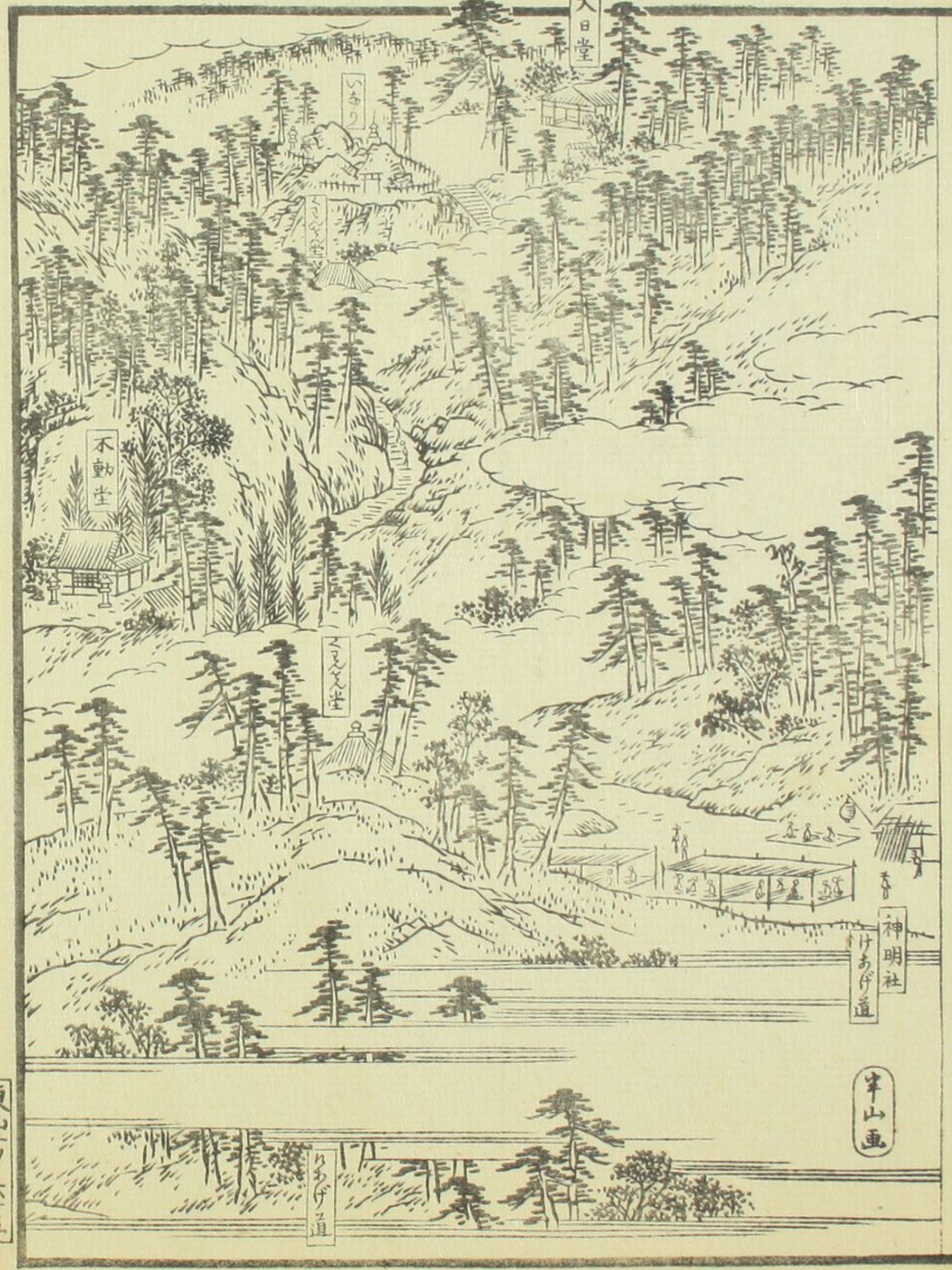
神廟巍々聳
碧霄瑞雲路
涉赤欄橋雄
規再復貞觀
舊靈鎖千年
福聖朝
原龍鱗





東岩倉
 大日山
 不動瀧
 山根小
 四月
 桃下

大日堂
 駒ヶ滝道
 此所より各中一
 不見ありて頗
 佳景あり
 観音堂
 神明社
 けあひ道
 半山道



東山一ノ六十五

半山道

順拜と云ふは故小四時の誦人間漸く頗る賑ひを増し
舊記云東岩倉寺の行基僧正の草創たり然るに荒廢年久しく後
文永五年戊辰九月の頃東山光堂光明院中興大圓上人爰に住居せ
られし時龜山の上皇脱履ありて禪林寺殿今の南禪寺也給ふ則ち當山
近き代以て時々臨幸ありて上人と清談ありて遂に東岩倉寺を以て
勅願寺と爲し給ふ本尊は聖觀音聖德太子の作鎮守は妙理白山権現
清瀧熊野以上三所権現と号し又後嵯峨院の御宇建長七年乙卯十二月
廿二日法勝寺下岡時古跡ありの阿弥陀堂供養の次手小臨幸ありて勅願寺や
行有阿闍梨と權律師を任せて其後後宇多院御祈禱の事上人命せり
上人即御門御等身の愛深明王と造り長日の護摩を初めり又弘安四年辛巳
異賊襲來の時院宣と夢り御祈と始む而して天下平に治りたり又龜山上皇
御落飾の後上人小御受戒あり又當山の近き山と元の如く當寺を寄せり云由
有房卿と勅使と仰下り然るに上人辭申し山山谷の事を受領はと

云これ其頂の如藍溜たる佛刹なりが應仁の兵火に罹り悉く焼亡一説小大
内介改券
小軍と云は時小大殿仏閣 今僅の小堂小觀世音を安置其古跡を存し
一時小焼亡りて後拾遺往生傳云東山小一の山寺は石藏寺と号し彼山寺は是行圓上人の
建立也件の聖人は本は大和國の人修行の次彼仙洞に至りて菴を結び始り
住に漸く四十餘年を経り松柏林を成し房舎院小満と云
藤木越 東岩倉山より三井寺を通ふ坂路より應仁記云南禪寺の上より岩藏陣と取る
瑞龍山太平興國南禪禪寺 東三條の北にあり粟田植髮堂の北の方南禪寺門前通より
佛殿 西向 釋迦佛 坐像二尺 脇士 文殊菩薩 右 普賢菩薩 共長尺余獅
金剛力士 立像二尺 以上厨子安け 脇檀 南方 中央 祠山大帝 大權修理菩薩
右 護法明王 腰と椅子懸る長 龜山法皇宸牌 已上南檀也
同脇壇 北方 達摩大師 百丈禪師 臨濟禪師 三像共椅子坐し
佛殿は二重屋なり額堂華堂と書け堅額也二重の間掲る此所舊法堂あり同祿の後
佛殿と云ふ兼用と古殿の地以前あり
山門 五鳳樓といふ佛殿の前より寛永四年藤堂高虎侯再建大板出陣のとき從者討
たせし徳の牌と閣上小安し菩提と帟ふ其始安も河八教迎金温の五像 寛永帝



春晚花過客至
會南禅仙館
春在青山九鎖
中京塵稅駕
向詩翁花應
羞引世人
至万綠樹
頭昨夜風
彦竜

半山画



其二

草川とくろく(彦彦)草白川の辺に云々
南禅寺記に少林院と慕聖院の同を
小草川とて比羅伽西雲の
両院の傍を大草川と云
云々

白川の末に
草河
景樹

東山二六十八



半山画

其三



遊南禪寺中
聽松院

遮斷塵緣無絡心
松風縷々似彈琴
門前飛閣高千尺
不及山房禪味深

新官碩

東山一六十九

有水涌出落澗曰曹源水云傳于庫院以供合山清泉也池之尾一橋跨空曰合澗々之水東自駒瀑流出而合也云瀑之上二峯層出者曰獨秀天下望也

天授庵山門の南あり當山の開基大明國師の塔所なり大明國師又佛心禪師等其諡

京極安知塔天授庵の墓地あり丹後國宮津の城主從四位下侍從京極丹後守高

疎菴石川自安号あり無閑和尚諱ハ普門と云正應四年十二月十二日寂り壽八十歳

細川幽齋塔号あり泉州岸和田の城主細川右馬頭元常の義子也

義晴公四男なり歌道の蘊奥と窮め茶道と武野紹鷗も學ぶ世文武兼備の名將と

歸雲院方丈の北あり相阿和尚の塔所なり龜山法皇御飯依ふ所の師と云

聽松院寺境の北あり庭前の林是ハ相阿和尚の作也

雍州府志云聽松院と号は或ハ聽松軒と林は曾ハ瑞松院小庵依り而ハ此院と

再興ハ改メハ聽松院と号ハ普廣院義教公ナリ瑞松院義晴公も茲ハ此院と
古ハの簡堂屋敷の跡あり而壁の跡あり義晴公要害の跡あり設けり
又松井佐渡守ハ光源院義輝公の寵童也此院の檀越なり此院を建ハ義輝公
も追薦ハ松井後ハ細川家小仕ハ其裔令ハ彼家小あり尔後信長公蒲生氏郷
藤堂高虎疾も又寓居ハ高虎設

松井佐渡守塔右聽松院あり佐渡守ハ其の名ハ新介康之元山城國西郊の人也

澄清拙塔同院あり來朝の僧なり名ハ正澄元人愚極智慧の法を嗣ぐ嘉曆元年歸

俊明極塔少林菴あり來朝の僧なり元人名ハ楚俊當山小住ハ

寧一山塔雲門菴あり來朝の僧なり宋人正安中小飯化ハ當山小住ハ妙慈弘濟國

信義堂塔慈氏院あり名ハ周信當山小住ハ土佐國の人詩偈小名あり

慈聖院右日所小塔頭なり應仁年中細川山名爭乱の日南禪寺焦土となり此院

石大燈爐一基山門の前あり高サ二丈有餘白石也

浴室山門の南あり

白檀二株佛殿の後あり

中門山門の前あり唐門つらり平生々

拳龍池中門の前あり池を中ハ截石の橋を

金地院池の南あり五山の僧祿司と稱ハ當院の開祖ハ大業和尚なり方丈の間の画ハ

東照宮御宮同院の南あり地面白砂

樓門正面あり額東照宮

唐門樓門の

寺領七百石

俊伯英塔 同院あり名徳倭入唐の僧なり

綾戸明神社 中門の外池の西あり 鳥居 南向

祭神 寺記云世小傳云文應帝の牛飼人綾戸の小路に住み常小醇酒と造り献げ

時大祠と建つ此小祠は位と正しく道と疾く松と兩行小植山門の境致し

綾戸の小路は天授菴の前を通り行宮の通條なり

獨秀峯 當山第一の峯なり 羊角嶺 鐘樓の上の嶺なり

神輿庫 總門の北のすこあり綾戸のやらの

總門 西向門前の馬場は左右松とやあり最長一以河小丹後屋と云る古き茶店有

夫當山の其始は三井寺の別院なり最勝寺と号し或は最勝光四天

王寺又は最勝光院ともいふ然る小此院小道智僧正 撰政從一位太政大

光明峯寺入道撰政道家公の息男ともいふ 狐のちり 住せり其後ともか小星霜と歴

僧正と号し三井長吏禪林寺又常住院ともいふ 弘安年中 太上皇龜山院此地小離宮ともいふ給ふ小より官外

小の公卿の館薨と連滔々たり然る小正應のともめ官中小物怪

巧つと障をかり晝夜小物怪出る事一千余たり衆人志ざり安寝

こゝに成せば陰陽頭小をト平し小故最勝光院の僧正道智の

靈のこゝを此地を秘惜し障等をかりし故小南都北嶺頭

密の諸師下の咒術巫祝お及ぶ百計手拱く同四年禪徒小勅有

東福の釋普門 當寺開山 命を請く二十の禪侶を率く宮中小安居は

夏九旬就中祖圓和尚を別行せし唯二時齋粥四時座禪は

のそ然る小物怪跡を匿し上下とも安泰小寝る夏と得たり上皇獻感の

余と普門と礼し加梨鉢多とけ給ふ又宮と華や寺と給ふ上皇ハ

たす今の方文龍洞室 大明國師 普門を住職とし御飯依する祖圓

和尚を共小攀り兩開山と稱せし遂小命は佛殿を創建しなむ

釋迦の座像と本尊とし文珠普賢の脇士を安し又金剛力士の二體を安

置此力士の靈像は其初八體を安し回祿の時今の二體飛出く石上小

在せると尚此余力士の靈驗數あり爰小略し大僧正道智の靈と祝す



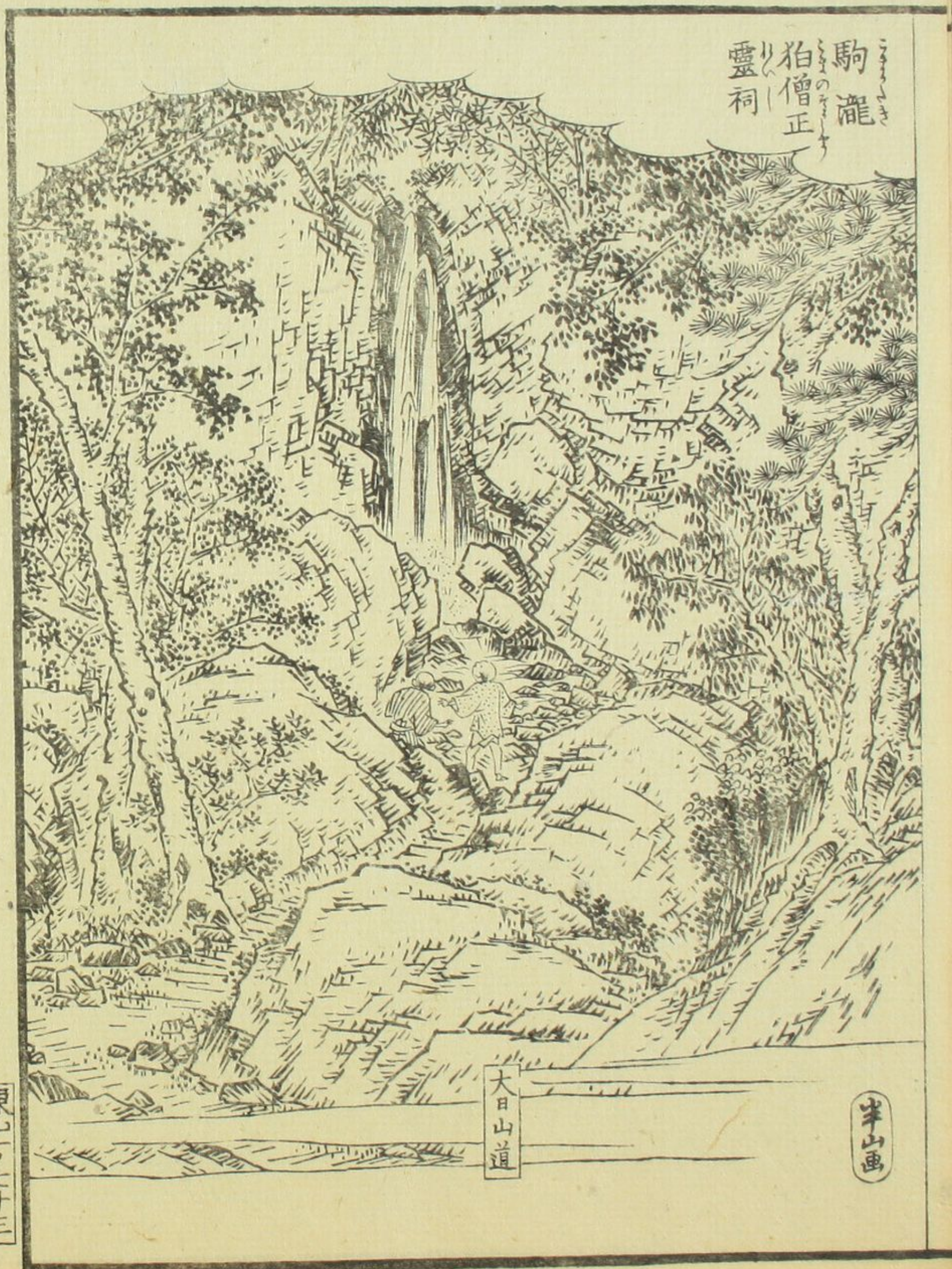
南禅寺東門道

真意
 此の山は
 昔の
 名を
 今も
 残す

似水
 松の
 せいの
 まの
 流る

護法神

駒龍
 伯僧正
 靈祠



大日山道

半山

東山ノ七十三

當寺の護法神社と駒駒の瀧瀧の側側に建建つるは神仙佳境と云

駒瀧獨秀峯の下にあり巨巖左右に樹木茂く 日工集云水徳三年七月八日上生院小赴云 點心罷駒瀧會久

雨降瀑漲事練と垂る如四山の爽氣恰洗字似府君唱

曰待々々世秋の月毛の駒が瀧

撰政殿これを數美給ふ猓猴あつ至る獨の老猓猴亭座小迫く

食を覓む諸人菓餅等を擲くこれを飼ふ猓喜踊く神祠小登つく手

づ門扉を推くこれを開く祠乃ち熊野權現を猓蓋其使者好

感吉兆ちりらふ按ず小祠僧正の灵と祭る諸書見たれ世人疎畧ふ為さ

狛僧正靈社同瀧の傍あり寺記曰道智僧正物故神と此瀑小擲む故小世小駒の僧正

藏春峽壑雷橋同灵祠の傍あり蘿月庵同上愈好亭今祭る

山州名跡志云南禪寺草創より先所住人藤時尚藤信頼の子也り

寺記の注云平治の元金吾將軍藤信頼伏誅其子其家小金多き以て人金侍後と云

而遂小金龍を埋めく以て此地の鎮と云

源有房井寺記云故黃門侍郎源有房卿一條左大將寺記云上官松本殿

門脇中納言注云良佐小龍興水あり道智僧正前云猓の僧正なり

真觀上人寺記云少林舊勝林と名く草河真觀上人故居也注觀宋小入居事

西福寺南禪寺門前民家の北あり其始り浄土宗西山流中玄智和尚の開基たり

本尊 阿弥陀佛立像長三尺惠心僧都の作觀音堂門前の傍あり

上田餘齋墓堂前あり碑の高サ二尺七寸中壹尺一寸五分墓石蟹の形

以蟹の墓石餘齋僧伏水の山中ふれと得く大可愛常閑居の履脱ふをえ用ひ

中小遺骨と納むと即像の書附小自筆あり傳と記せり此人浪花の産也

上田氏名秋成餘齋と号し無腸居士と号し和哥と善し國學小精煎茶一家と云俗

業と云ひ花浴のり南禪寺の雜掌儀具氏の懇意と云其家のやり小四疊半

の居と云又鷄の屋と云生涯奇話多く容易と云

余齋自作の像の書小記と云

無腸生浪華客于京師十六季無父不知其故四歲母亦捨有倖上田氏

所養歲六養母逝性多病時收發驚痾後母依慈愛成長歲廿七

父逝三十八條回祿失居始於京攝之間移宅凡十餘度每地在神

處近似逐生活商戶破産一為醫患疾不立業泊然廿年其間玩

好國之國詩、不以爲業、年五十七頓失左明、六十五僥倖遇神醫、得
在明、又及右眼、後母給仕、五十三年七妻糟糠、廿八年今、年七十
仕嗟乎、天の何生我耶

老わぬ世の人を、わが男なりと

上田無腸翁之墓

凡物之異常者、物之病也、然世俗在物貴、其病在人、忌其病、露之
成膏霜之成華、天之病也、山之峻峻、不可梯水之洞、滿不可掘、地
之病也、柏之有文竹、之有岐草木之病也、茶鐘之有窰變陶之病
也、石之有眼硯之病也、巢許之猖夷齊之清陳仲子之潔人之病
也、世俗在天地山川草木器械、患其病之少在人、則忌之、畏之、避
之、如蛇虺、不亦太左乎、吾友無腸翁、狷介峭直、視富貴如腐鼠、以
俗士爲蜣螂、世俗忌其病、畏而避之、遊其門者、履履如也、然一毀
一譽於翁、平何有翁、初在城中、厭其擾擾、遂苦菘于瑞龍山中、一
裘一褐、疏糲自安、翁博聞彊識、過眼爲誦、是以不蓄一書、室中唯
有一二茶具而已、最長于國字文章及國風之詩、興到則一日數
十百篇言出于口、皆成文、所著數種、已行于世、又有萬葉集訓詁
及筆記八十餘卷、一日命其徒湮之廢井中、余聞之也、遲不能奪

去藏之名山、嘆惜無及、後值翁、詰其故、翁咲曰、一時謾筆、意未盡
者頗多、矣、然年力頽侵、不能就區區鉛槧之業、且與夢中說夢、向
癡人不如、投井中、清我魂、頃者、仿曾補好忠、每月集賦三百六十
首、使余題其首、余讀之、往往不能得其解、復何以足知神出鬼沒
之妙焉、然余識翁舊矣、因略序其爲人、末知後世以翁爲文苑傳
中人、耶、爲隱逸傳中人、耶、其必有辨、姑記以備史料

右榜亭先生題、無腸翁所著、後每月集之辭也、翁嘗屬其徒大
澤春作曰、此辭能說破吾之爲人、吾死則請、建石以勒、此辭不
必要另費、諛墓之饒語焉、今茲辛巳六月廿七日春、作與同志
者、修其追祭、此爲十三週之忌辰、因亦相謀、欲從遺囑、以期不
朽、乃使余操筆、余之於翁、亦相識也、義不可辭、揮淚書此

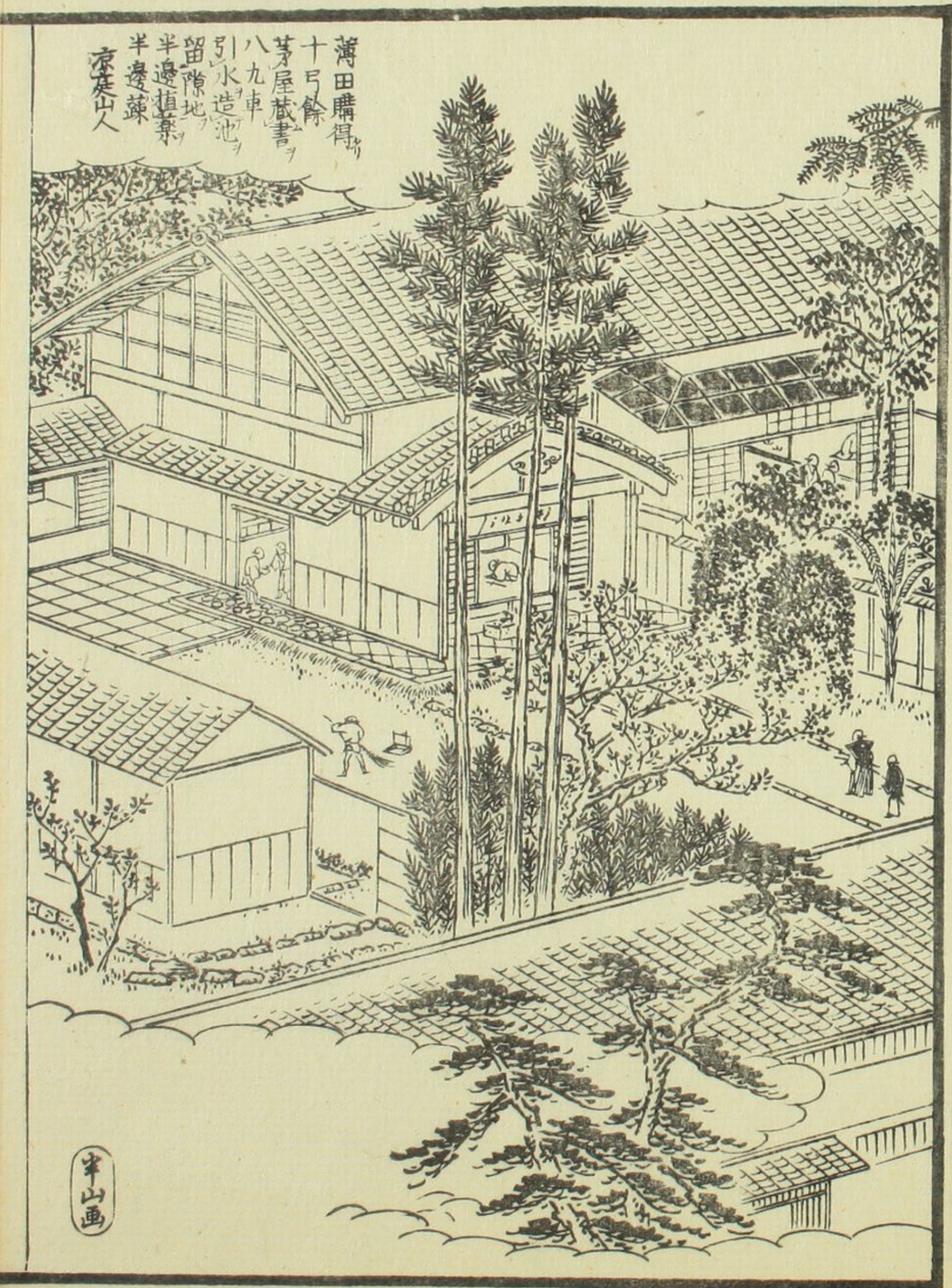
平安 紀惟德誌

浪華 森世黃隸

順正書院

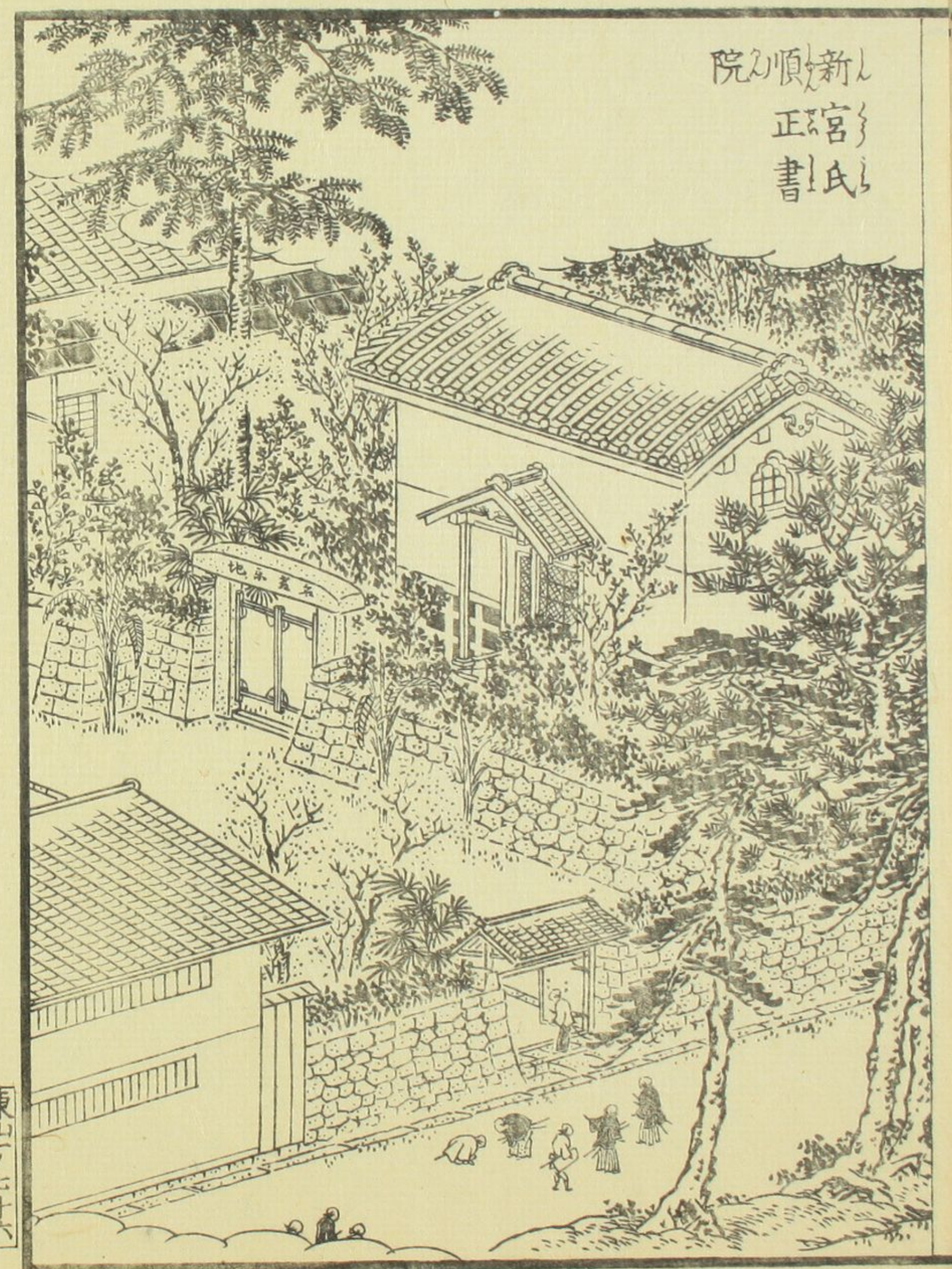
講堂

南禪寺門前松林の北傍あり近年医家新官氏の創建より所の學校なり
園中數百畝菓樹ふよひ葉草と種池小龍堂とヤト
玄關の額順正書院の大字ハ
文庫 石門の扁榜ハ名教樂地の四字を則以
祭酒林家の筆
講堂の四面、東武佐藤一舟浪華被崎小竹おし海内の名儒の記文扁額十余扁と
かぐ例月三日講譯正月廿三日開講十二月十三日止春秋仲月十五日釋菜



薄田購得
十弓餘
茅屋葺書
八九車
引水造池
留隙地
半邊植桑
半邊疎
庭是山人

半山画



新入
院
正宮
書氏

東山ノ七十六

順正書院記

丹後新宮涼亭翁位宗師後年往年冥地於山南洋寺坊內作書院匾曰順正書院□□□□□□度書而賜之林祭酒書名教樂地四字匾其門蓋取白鹿洞門扁之義也屬余為之記余喜而書曰昔者唐李勣始讀書廬山五老峰下其後又公朱夫子及明李慶陽胡居仁單相繼講道於此名曰白鹿洞書院至今不衰抑本朝學校之設久矣
大内裡之時始置淳和獎學二院以教源平二氏之士而書院講習則不聞也至源倉室町氏兵亂不已士大夫之教廢池及江戶府開大開弘文館以育旗下之士其他大小諸侯學校之設日盛而書院講習則未聞也然則今之有以舉也矣
本朝書院之權輿欽其宣傳之於後益大之使與麻洞并於東西也地久而為廢地翁得之手披荊棘芟蕪莽命之管之費數千金蓋在講習道義其意美矣顧立後之守之者何如而已夫桑田碧海古今沿革不一則

安知書院之不變為佛宇作菴為園圍汗池為畝畝町畦荊棘蕪莽使貫美意卒湮滅于無聞哉子孫其宜守焉而無失焉子孫不能守焉則請之於寔破則葺而新之壞則修而完之百業之後使翁為
本朝之李勣則豈不翁之榮乎曰翁之榮一人之私也書院之存國家之公也則使書院存于無窮不為缺典乎本朝則豈亦不國家之榮乎是余之所以喜書之者不為翁書而為子孫書也書院之東北土肥壤燥往將建夫子廟而今未成也

天保辛丑正月

久留米儒員後學後者松樸

以余の記文を小畧す

十禪師辻

南禪寺の前南北の大路の四辻を古以て十禪師の社の鳥居あり故に以通を鳥居大路と云ふ十禪師の社今青蓮院の管内小座あり
著聞集云一條院の御時御秘藏の鷹あをさる云件鷹を粟田口

十禪師の辻をさる行人小見せしむる

大將軍社

右同所の北大路の東側あり大將軍の神を玉城の四隅小祭と云ふ是を今ハ社廢社の名残也近來地蔵の小堂を建てる標あり

尊良親王墳

永觀堂門前條南傍田圃の中より後醍醐天皇第一の宮一品中務卿尊良親王八元弘の乱小土佐国畑小配せられ後飯沼のつて延元二年三月六日越

前国金ヶ崎小配の自叙

按ずる小太平記不載前金ヶ崎少く成りたり新田一族の首もと京へ上せたり大略と渡りて獄門小かく一の宮の御前八幡林寺の長老夢想国師の詩小おとくれ南菜礼と執

行や云々塚塚ハ其内首と云々所々

南山小譜云後醍醐天皇一宮尊良親王母贈従三位藤原為子 権大納言為世卿女

應長元年誕生正中二年元服二品中務卿元弘元年帝小従り笠置小

入迂り河内國東条城小入同年十月二日自出り囚小就同二年三月八

日土佐國小配せり同三年八月飯沼同年九月廿二日一品小叙り延元

元年十月立太子北國小入同二年三月六日越前國金崎城小於自叙

年二十七云々

東山名勝圖會卷之壹



文久三年癸亥新鑄

東山之部五冊

再撰 花洛名勝圖會

京攝書肆合梓



浪心齋稿通
花北太郎町共
書河内屋喜六
經板製本

